
ROUTE・ルート

OGRE-ASHYURA+1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ROUTE・ルート

【Nコード】

N3540Q

【作者名】

OGRE - ASHYURA + 1

【あらすじ】

ある場所を守るべきものを守っていた少年アシュレイは突然の軍の襲来で滝壺に落ち気づけば奴隷に……
それから彼の旅は始まった。
最初の目的は故郷へ次なる使命を帯びて仲間となった者達と共に歩いてゆく

始点…… 『覇者は惑い新たなる道を選ぶ』

覇者と呼ばれる者はこの地上の全てを統べるだろう……それは始まりであり終わりでもある。

己の力に溺れず信念を抱き、己が夢を叶えんと先へと彼の者の足を押し、忼なる志を折らず……時事折々に柔らかにはたまた固く。彼の者はその道を歩むだろう。

彼の者と共にある『友』は賢明な既知、力、精神を与えられ彼の者に尽くし、また敵なる者も明快なる将は彼の者に力を与え末代まで名を広める。

覇者なれど彼の者として越えられぬ壁を持ち、崇拜せし神に召されこの世を去ることが定め。

世の……界の理を曲げんとする者は時代にて覇者として生るべき者に討たれ、覇者は末代まで絶えぬ。

世が……界が……大地がくだけぬ限り生命の輪は崩れぬ。

神として……覇者としてその力は得ずして定を崩さず界と世は成り立つ。

我……、いつぞの覇者と知らぬれど覇の生くる道を綴る者。

守りの覇者、ナイト・ガウス

「おい！！ その奴隷！ もたもたすんじゃねえ！」

残忍に鞭が飛びその少年は鞭で打たれる。まだ成熟し切っていない幼いとも言わないがそれに近い雰囲気を残す少年はどこかで人攫いに遭いこの街に連れてこられたのだ。彼の名はアシュレイ・オーガ・モノライナーという。アシュレイは近くに他の奴隷使いが居ないということを知ると手に付けていた枷の鎖でその大男の太い首を絞め上げ鎖で切り裂き、血が出る程に強く絞め上げて殺し逃げ出そ

うとした。だが、彼には逃げ場などない。いくら彼の身体的な機能が人一倍高く、まだ若いいため柔らかな肉体をしていても、ろくな食事をしていないため体力が足りず高い石造りの塀を超えて外界に出るなど不可能だった。たちまち彼は捕まり奴隷ということもあつてかすぐに死刑が決まる。彼も後悔はしていないらしい。ただ、彼には願いが一つだけあつた。故郷の妹や親友に会いたいと……この奴隷の収容所には何万もの命が捕らえられ毎日その尊い命は削られていく。奴隷と一般人の違いは背中に焼き付けられた『印』だ。鎖の蛇の紋章である。それをつけられた人間やその他人に近い知能を有する生物の内で売られた者は助かる見込みは無いに等しい。しかし、彼には幸運が巡り今は外の世界へ友と足を進め己の道を確かに歩んでいる。アシュレイはある年をとった女性や命をかけて彼を前に推そうとした騎士と出会い、その彼の持つ力を使うことを……戒めから解き放たれ幾千、幾万もの命を救い同時に……何人もの命を奪ったのだ。彼は……今、その重荷を背負つて新たな道を歩んでいる。故郷を目指して確かに……彼の意志で脚を進めているのだ。

「ぐ……う……」

「おら！！ 立たねえか！！！！」

「う……く……」

鞭がさらに繰り出される。その度にこの男の死は刻一刻と迫つていたのだ。背中に焼き印のある少年は痛みに悶え苦しむ中でも抵抗するようにその奴隷使いを睨みつけ、ゆらりと上半身を起こしその左右の色の違う目をさらに嫌な輝きを帯びさせて向けた。金と銀の目はその男を捉えて離さない。三度目の鞭が振り下ろされ上半身は何も纏わない少年の背中にあたり高い張り詰めた音が響く。周りの者達は視界に入っているはずなのだが誰一人助けようとしな……助ければ懲罰を受ける。それに下手をすれば協力者がいたとして計画性を問われるのだ。そして、無理矢理な尋問の末、殺される末路

を歩むことになる。

「何だあ！？ そんなに懲罰が受けたいのか？ 『呪われた血』の癖して人ぶってんじゃねえよ！」

「ぐ……訂正しろ」

「あ？」

「訂正しろと言ったんだ……」

「奴隷の分際で人間様に口きこうつてのか？ ええ？」

「人道に反する者に言われる筋合いは無い……訂正しろ『呪われた血』とは呼ぶな！！ 次にその言葉を口にすれば貴様の命は無いぞ……」

だいたい180センチ後半の体格を持ち筋肉粒々な奴隷使いに比べてアシュレイはだいたい170センチあるかないか程しかなく、ろくな食事を受け取っていないためか彼はガリガリで骨張っていた。鞭は乾いた石床を一度打った後にアシュレイに向けて振り下ろされたがそれは虚しく空を切るだけでアシュレイには当たらない。次に奴隷使いが彼を鞭打つために鞭を振り上げアシュレイを狙った時にはアシュレイの姿を見失っていた。暗くなり始めた空の時間帯をアシュレイは利用したのだ。彼は奴隷使いの目が闇に慣れていないことと石を投げアシュレイの居る反対側に音を立て聴覚の先入観を使って奴隷使いを出し抜きそちらに注意を引かせ、高く飛び上がった。その次の段階として奴隷使いの首に手枷の長い鎖をかけて奴隷使いの背中に一度足をかけてから腕をしながら鎖を交差させ首を絞めたのだ。だが、やはり奴隷使いの方が今の状態では力に関しては腕力と言う意味で、体調でも血色は奴隷使いのほうが比較的良好に見える、アシュレイは蒼白な顔の色をしておりその観点から奴隷使いのほうが強いように見える。そこで彼は不利な状況を打開するために体格差を逆に生かして鎖で奴隷使いの首の肉を絞めた状態で切り裂いたのだ。

「懲罰などいらならしいな！！！！ 死にたいならいつでも殺してやる！！」

「ハッ……………」

「どこに行きやがった！？ ははぁん…… 所詮は子供の奴隷だ……。不用心にも音をたてるとはな……。そこか！！」

「お前こそ…… そんな感覚では死ぬぞ」

足は鎖の長さだけでも地面に付くには付く。だが、それでは戦えるような体勢ではなくなってしまう……。そこで、あえて彼は先に足を地面につけ軽く助走をつけたうえでコンパスを回転させる要領でその奴隷使いの前に体重を移し一回転して首の皮を鎖の接続部分の間に噛ませ摩擦と遠心力を利用して切り裂き殺したのだ。最後に前に回って着地した彼はもちろん鮮血を受け血みどろだった。いくら鎖でとは言え首を切り裂いたのだ……。それはそういう結果になってしまうのが普通なのだろう。その後の行動としては、彼は周りの外壁を登れないことはとうに知っていた。そのためか堂々と警備の厳重な正門を抜けようとして策略を巡らせ、さらに軍の選りすぐりの番兵や他の兵士を6人とその管理官を殺してその堀に囲まれた街を出ようとした。しかし、軍が騒ぎを聞きつけて到着し、少しの間だけ抵抗し湧き出るように現れる兵隊に阻まれその脱出作戦は虚しく終わった。彼が検問で止められたのは無理もない。なぜなら先ほど述べたように白銀の髪を血で染め顔の半分をどす黒く染めていたのだから……。そのような状況下ならいくら薄暗くてもわかる。だが、不可解なのはアシュレイは途中から無抵抗になり怯える軍の兵隊に圧されるままに監獄へつれて行かれたと言うことだ。それから数時間が過ぎ牢獄に彼はいた。

「ハハハハ！！！！ 流石にこの厳重な警備では奴隷共も大人しくなるでしょうね。アトモス様。ここの守りは完璧ですよ！」

「そうとも、この俺も居るわけだし……だが、お前らはこの皆を物と思うな。我々はあの王に使われないようにここを守らなくてはならない」

「確かに……でも、武勇は聞いております。管理官の剣の腕は王国の本軍の上部の方にも匹敵するとか……」

「まあ、詰まらん世辞はよせ。だが、ここを任されたのもこの剣の……」

断末魔の叫びに凍りつく騎士の一同……。それはこの收容所の常駐兵の一人の声だった。すぐに周りの警備をしていた兵隊が声を掛け合い剣の柄に手をかけて抜き放ち警戒しながら複数集まる。その現場で横たわっていた衛兵は鎖で首を絞められ死亡した状態で発見されている。……という詳細報告が騎士のいる正門に入っている途中にその場の五人は二人分の血をシャワーのように浴びた。憎しみの輝きを目に宿す白銀の髪の毛の男の奴隷が目にもとまらぬ速さで走り込み、敬礼しながら報告をしている鎧を着た衛兵の首を後ろから鎧ごと叩き切ったのだ。二回目の攻撃をアトモスと呼ばれた管理官はなんとか剣を構え受け止めたがその隣で報告を羊皮紙にまとめていた兵士は一瞬遅く分厚い金属の装甲を物ともせず右肩から脇腹にかけてをざっくり切られ声を上げることなく倒れた。その光景が繰り広げられる場所の隣にある小屋から剣を構えた騎士達が現れアトモスの前に立ち壁になるようにしてアシュレイに剣を振るが……まったく刃が立たない。

「ギヤアアアアアアアアア……!!」

「今のは何だ!? 何があつた!? 西側からか……まさか……誰かが逃げ出したのか?」

「ハア……ハア……。申し上げます!! 西側の正門へ抜ける細い抜け道に配備されていた衛兵が首を細い鎖や縄のようなもので絞められ絞殺されていました!! 目下犯人の搜索と奴隷の人数の確認

作業に……あゝあゝ！！！！」

「な、何なんだ……速いぞ！！　くっ……この太刀筋……ただものではない！！」

「アトモス様をお守りするぞ！！」

「お前たち！！　待て！！　早まるな！　お前達のかなう相手では……」

この時にはアシュレイは気が狂ったのかそれとも何かを意図的にしたのかはわからないが殺戮兵器のように彼らにその恐ろしいまでの剣裁きで死という罰を与えていた。この騎士達は全員が倒されるまで一分とかならなかった。アトモスが守る隙を与えず次々にアシュレイは怒りのままに騎士をなぶり殺したのだ。4人の騎士の内、一人目は殺された伝達兵の剣を奪い二本の剣を振り払ったアシュレイの斬撃で剣を握っていた両腕を切り落とされた後に分厚い金属製の装甲を二本の剣の内の片方で貫かれ鳩尾を串刺しにされて息絶えた。二人目はその騎士の後ろから決死の覚悟で前のめりに突きを繰り出し刺殺を試みたがアシュレイは騎士の突き出した剣の峰を拳で殴りつけ、その騎士は剣を弾かれて次のアシュレイの人間離れした動きに追いつけずに上半身と下半身が分離して息絶えた。三人目と四人目は二人で交互に短刀と剣を繰り出し一事はアシュレイを圧すが途中からバーサーカーのように無差別に剣を振り回すようになったアシュレイの力業に圧され三人目は首を切り落とされ四人目は剣で叩き切られ脳天から胸までに剣がとおり命なきものと化したのだ。その後もアシュレイの背後には一般の官位のない戦士が現れ震える足で剣を構えてくる。アシュレイは獣のように怒り狂いいつ襲いかかって仕方がない状態だった。その時、騎士アトモスがアシュレイに厳かな声をかけ前に歩み出す。

「お前……名はなんという？」

「グルルルルルル……ア……シュ……レイ……！！　アシュレイ・

オーガ・モノライナー……」

「オーガ、そうか……あの一族は生きていたのか……。戦士アシュレイ！！俺を切れ！！騎士として部下を目の前で守れずに見殺しにし上官に逆らえず沢山の命を踏みにじつた……この命を持って弁明しよう！！さあ、時代の申し子よ！！」

たくさん戦士達が見る前で剣を左手で鞘に収めたまま握りしめアトモスは理性を取り戻したアシュレイの本当の太刀筋を目の当たりにし彼の理想とする騎士の名誉に恥じぬ死を選んで息絶えた。アシュレイもそれら主を護ろうと身をていした戦士と正しい心根の騎士に敬意を表し剣とともに遺体を一列に並べ、彼らの目を閉じ胸の上で手を組ませ肩の力を落として震えながら泣いている戦士達に頭を深く下げその場を去った。そして、石造りの道を歩きながら街の外を囲う巨大な防壁にある8つの門の一つにたどり着きそれまでにアトモスや彼の忠臣を含め総勢82名の兵士の命を奪い翌朝裁判にかけられずに公開処刑になることになったという。公開とは言うが立ち会うのは貴族や軍の上層部の人間のみだ。今、アシュレイは地下牢にいる。門前での戦闘でかなりの手傷を負っている彼は肉体的には生きているのがやつとの状態であるが意識と視界は怪我のわりにはつきりしており動かない体に鞭を打とうと必死にもがいていた。そんな彼に視線を注ぐ人間らしき気配がある。その牢には既に先客が居るようだ。その気配の主は囁れた声でアシュレイに声をかけ起きあがらせる。

「ほう、まだこんなに若い子が兵士の命を82人も奪ったのかい」
「お婆さんは……誰ですか？」

「ワシか？ そんなこと、今はどうでもいいだろう。それよりお前は何故あそこを出ようとしたのだ？」

「家族に……友達に会いたかったです」

「そうかい……そいつは安心したよ。悪等ではないみたいだね。体

は動くのかい？　ありやまあ、こつぴどくやられたもんだねえ……よく生きてられるもんだよ」

「お婆さんはどうして……」

「ワシは呪い師じゃった。孫に会いとうてこの近くの山に来たんじやが……屍呪師（しじふし）と間違えられてな。おや、お前さんは……」

「俺を知ってるのですか……？」

「違うよ……昔お前さんみたいな小童を助けたことがあってな。お前は生きたいかい？」

「当たり前……です」

「わかったよ……一度だけチャンスをやろう。お前さんは断頭処刑らしいからの……『覚醒せよ。汝、覇を紡ぎし者その体に強き鼓動をもちて覇を果たさん……』どうじゃ？」

「変化は感じられませんが……今のは？」

「ふむ……その時がくればわかる」

それからアシュレイは老婆に聞かれるままに口を開きそれまでの過去を話した。すると老婆も自らの名前を明かし孫の名も明かし彼に頼み込んで来る。アシュレイと同じ年くらいで女の子だという彼女の孫はこの近くに住んでいるらしい。老婆の特徴は薄暗くてわかりにくい白髪混じりの緑色の長い髪だ。昔は美人だったのだからそんな面影が残っている。そんな老婆との和やかな会話は水が滴る地下牢で夜更けまで続いた。その間に脱出の方法まで決められ打ち合わせも既に済んでいるようだ。彼女がどのように知り得たかは知らないがアシュレイは明日の朝一番に断頭処刑を受ける予定らしい。老婆は次に貼り付けの刑になるらしいが自分は死んでも構わないと笑っていたがアシュレイはそのつもりはまったくないらしい。

「俺は故郷の近隣で友人たちと山を歩いて人捜しをしている時に軍と接触して不意打ちを受けなんとか妹と友人を逃がし滝壺に落ちてしまっただけは記憶がないです」

「流石は神戦の二種族の血を引く者じゃな肉体、既知、精神が強い。しかし、お前さん……滝壺に落ちて大丈夫ならいつでも抜け出せたであろう?」

「二週間の断食は流石に堪えましたよ」

「確かにそれはいくら神戦の一族とてキツいだろうな。奴隷使いも惨いことを……このように若い少年にそのような仕打ちをしたのか

……」

「そういえばお孫さんはおいくつなんですか?」

「ああ、アンナは今年で16歳になる」

「確かに近いですね」

「そうそう、ワシの名はフレイア・ウォルストラー。孫はフレイア・アンナだ。お前さんは?」

「アシュレイ・オーガ・モノライナーです。出身はアゲレイアの山中の村で今年で17歳になりました」

「なあ、アシュレイよ。唐突で悪いがワシの孫と結婚してはくれぬか? ワシも年でな。そろそろ跡目が欲しいところなのだよ」

「……いきなりは」

「まあ、後から会って決めなさい」

「考えておきます」

朝を迎え神父らしき中年の男が現れアシュレイとウォルストラーを連れ出した。既に貴族や軍の幹部が集まりアシュレイをしげしげと見ていた。体色が青っぽい白色な男を見れば誰でも気になるはずだ。その後、アシュレイは断頭台に首を通され金具で押さえられたが今の彼にはあまり支障はない。既に二人の計画は動き出していた。それに気付かない死刑執行人は一段高い断頭台が置かれた差し詰め舞台のような場所に登り始める。ウォルストラーの隣には剣を腰につけた兵士がいて彼女は魔法を使ってある行動を起こしていたのだ。執行人が登りきった瞬間にアシュレイは力を込めて石で作られた手枷を砕き断頭台の木製の部分を破壊し金具を曲げてウォルストラー

の動きにタイミングを合わせた。

「これより……な……!!」

「ふんっ！ ウォルストラーさん！」

「わかつておるわ！」

兵士が剣を掴もうとするがその剣は空に踊り出しアシュレイに渡った。会場はパニックに陥っている。剣を抜いて舞台側に駆けてくる軍人も居たが次の瞬間にアシュレイの姿はウォルストラーの真横にあり手の縄を切り彼女を背負った状態で走り出す。ここまでの計画は順調だがやはり二人では無理があるようだ。アシュレイは良くてもウォルストラーは寄る年波には勝てずスタミナが切れてしまい魔法が使えない。アシュレイは再びウォルストラーを背負って走り出し城内に入り込んでしまった。そこは城と言うよりは要塞に近い設備だがそこだけは明るめな装飾がしてあり中に入り身を隠す。その最中に……。

「はあ……はあ……、奴らは……年寄りにも……容赦せんのお」

「ええ、かなり予定が狂いましたね。ここはどこでしょうか……」

「要塞の内部だと言うことは確かじゃな」

「外の張り詰めた感じとはまったく違って穏やかですね」

「ここはおそらく……」

「しっ……誰が入って来ます」

クラウンを頭に乗せた少女が入って来た。次の瞬間にアシュレイは剣を少女にかざし囁くように話しかける。彼女は大きな青色の瞳に白っぽい髪をしていて『美しい』という言葉が似合う容姿をしていた。要塞に合わないレースのついた天蓋付きベッドやお洒落な家具は彼女の部屋だかららしい。アシュレイが声をさらに落とし兵士が来た時の対処の方法を強要して扉の反対側に身を隠しながら剣を

突きつけている。

「動かないでくれ……」

「ひっ……！！　な、何が欲しいの？　財宝ならもつと奥の部屋に

……」

「違う……。君を傷つけたくはない。これから兵士が俺たちを探しにくるだろう。その時に俺たちを隠してくれればいい」

「わ、解ったわ」

アシュレイの予想通り、すぐに兵士が現れ始め隠密作戦は決行された。彼の指示通りに少女は事を運び外の騒ぎが収まるまでは部屋に止まることになる。この少女はウォルストラーの話を聞いて心に染みたのか室内で話し込んでいた。アシュレイは剣を腰につけて部屋の隅で外の警戒を怠らないようにしている。彼女の部屋は広いため彼らを隠すのは容易らしく少女は彼らを隠し夜に抜け出すのに強力してくれた。

「そんな……お孫さんに会いに來ただけで捕まったのですか？」

「まあ、全体像はそうなるな」

「酷い……いくら種族の違いが有ってもそれはあまりに酷すぎる！

！」

「シアン様と言ったか。声を落としてくれ。俺達が見つかってしま

う」

「あ、はあ……わかりました。あの、そちらの殿方は」

「アシュレイ……名乗るくらいはしてもよいだろう。いくら彼女が信じれんのであってもな」

「確かに失礼した。俺はアシュレイ・オーガ・モノライナー」

「アシュレイさんはお幾つですか？　見たところはそんなに差はないようですし年齢も近いように感じますけど」

「１７歳です」

「やっぱり！！ 私も１７歳です」

「静かにしてくれ……頼むから」

夜になり彼女、プリンセス・シアンは俺達のために一肌脱いでくれた。衛兵の鎧を持ち出しアシュレイへ『先読み』と呼ばれる仕事の魔導師のローブをウォルストラーに渡し着替えさせて変装させると打ち合わせをして警護の衛兵と先詠みがシアン姫の横を歩いているように見せてカモフラージュしてくれたのだ。

「さ、ここまで来れば安心です早く。城外へ」

「ありがとうございます。シアン姫」

「いいんです。あの、アシュレイさん？」

「何だ？」

「私を連れ出してくださいませんか？」

「それは……」

「今はその時ではない。俺が体力を完全に取り戻したら助けに来よう」

「お前さんも隅に置けんなあ」

「お喋りはこれくらいにして……では、しばしの別れ……」

アシュレイとウォルストラーの脱出はシアン姫の助力もあって事に成功しアシュレイの考えていた作戦第二段が始まるうとしていた。城と奴隷の収容施設は正規の道筋で向かうと案外遠く夜になると当直の兵士以外の兵士は皆、兵舎に帰る。すると監視や防備も薄くなるのだ。アシュレイは収容されていた期間は短いながらもその事情を把握し既に動いていた。作戦もうまく運び奴隷達を逃がすことには事欠かず内部に侵入したウォルストラーが鍵を使い自由に扉を開いていく。この期を逃さないように奴隷として国に捕まえられていた者達はその収容施設を後にする。出ないことを選択した者達以外が必ず見ることになったのは見覚えのある白銀の髪の子少年

が騎士らしい少年と何かを話しながら戦っている姿だった。

「アシュレイよ……本当にそんなことをするつもりなのか？」

「ええ、やりますとも。今は我々の搜索で衛兵は外に駆り立てたれているはずですからね。居たとして人数が多ければ俺が何とかします」

ウォルストラーの心配は杞憂に終わり首尾は良好。アシュレイの言うとおり監視の兵はいつもの10分の1にまで減らされ外部で二人を探しているらしい。ウォルストラーは呪い師ということもあり魔法を複数使えるようでその10分の1に減らされた監視兵を眠らせてから縛り上げ鍵を奪って中を周り外に出る意志のある者だけを解放していく。

「ほら、外に出たいなら今だよ！ 衛兵は出し抜いたから行くなら早くおし！」

「な、何だか知らないが……早く行くぞ！」

「みんな！ 急ぐんだ！ いつ兵に気付かれるかわからんからな！」

「おい、聞いたか？ みんな 走るんだ！ 怪我の酷いやつや動けない奴には手を貸せ！ 出る意志のないやつなんかほっとけ！！

俺たちは自由を勝ち取るんだ！」

その奴隷達は外の轟音に既に気づいていた。凄まじいまでの砂埃の中で飛び上がり前進して来た少年騎士の顔面に強烈な一撃を叩き込みその騎士の反撃をかわしながら拳を打ち込んでいく。彼の足下には真つ二つに切られた剣が落ちていて戦いの凄まじさを物語っている。事実、戦闘に関して素人な彼らはアシュレイの放つ拳が見えていない。もちろん剣裁きを見ても技の判断などできないだろう。

「我が名はシド・バトラー・アトモス。この場で犬死にしたアトモ

スは我が父なり。貴殿がアシュレイ・オーガ・モノライナーか？」

「確かに俺は騎士アトモスを打ち取った。たがな、いくらその息子であつても彼の死が犬死にだとは言わせない」

「何だよ……そうじゃないか！　犬死にじゃないか！　何も変えられるものなんてなかった。だが、周りの戦士が教えてくれたよ。父さんは剣を構えずに奴隷達への弁明として命を捧げたつてな」

「確かに彼はそう言った。俺は騎士ではないが彼の意向を曲げることはできなかった。そして、彼の仲間の誠意にも感服し彼らが名誉ある死を迎えたように騎士アトモスを打ち取ったんだ。シドと言ったな。お前はそれを踏みにじるのか？　いや、もう踏みにじったんだ……」

重装な鎧をまとった騎士が剣を抜き盾を構えたためアシュレイも剣を構えた。しかし、剣はシドの剣を受け止めようと前にかざした瞬間に真つ二つに切り分けられ使い物にならなくなった。剣を切られたためそれを投げ捨てアシュレイは特殊な足技を使いシドの近距離に詰め0距離攻撃を見事に顔に決め一対一の勝負の今頃は夜、相手が未知数なため深追いせず反撃を待つ。石が風化し始めた壁は見事にその部分に大穴を作った。そこから騎士がけて速くはないが鎧を着ている割には速く走ってくる。剣裁きはかなりの腕をしており父親の騎士アトモスの技量も伺えた。

「踏みにじつたつて何だつて関係ない！　確かに父さんは上官に逆らえずに奴隷を押し込めるのは心苦しかったに違いない！　だが、それで何も変わらずに死ぬのはただの小心者のする事だ！！」

「変えられるか変えられないじゃない。誰があ立場でも変えることなどできないことくらいお前にも解るはずだ。俺は彼の選択は間違つてはいなかったといいたい。お前のように結果と目先の事実に捕らわれ本質に目を向けられないただの木偶の坊とは彼は違つ！！

終わりでだ！」

……ところがカッコいいことを言った割にはシドが盾をかざし目を閉じると盾に拳を当てたアシュレイは弾き飛ばされた。……がそれでも二発目でシドの顔を再び捉え吹き飛ばした。その直後に逃げ出す意志のあれ奴隷達の全員が脱出しウォルストラーが殿をしていたらしく内部からトロトロ走って出てきた。それを目にするとアシュレイもシドに言葉を残してその場を撤退し衛兵を数人殴って気絶させ街の門扉を彼が破壊し奴隷達は見事散り散りに逃げることでできたのだった。アシュレイはウォルストラーと共に近くにある彼女の故郷に向かうらしいその後ろには孤児院から拉致されたらしい身寄りや行く宛がない小さな子供達もウォルストラーの厚意で歩いている。その一人が腫れたアシュレイの拳を触り心配そうに見上げる。彼はにこやかに微笑みかけ頭を撫でる。するとウォルストラーが立ち止まり秘密の通路らしく子供達を先に通し二人もそこに入って行けば……そこは隠れ里と呼ばれる人間に見つかってはならない種族の人々が集まる集落の集合体だった。森の木を使ったログハウスに沢山の住民が住んでいるように見えることから言霊の樹街しじまのじゅがいと呼ばれるらしい。ウォルストラーの説明の後アシュレイが立ち止まり警戒を始めた。急なことで後ろが数人玉突き事故を起こしたがアシュレイの顔の険しさを感じ取り皆固まって座り込む。

「お前の父は俺が生きること推してくれたんだ。お前も腐った視界を変えたいならまず、自らが盾になれ！！それが今のお前が変われるのに必要なことだ……」

森の中でアシュレイは殺気に気がつき既に放たれた毒矢を空中でつかみ真ん中の子供達に当たらないように警戒をしていた。たくさんの殺気が充満する中でウォルストラーが一言告げるだけですぐにその状況は解決する。ここは高い木々が多いため解らなかったがその後すぐに夜が開け始めており子供達は警戒して出てきた複数の種

族の大人達に抱きかかえられ一度、村の集会場に預けて彼女の家に移った。見事な邸宅だと言うことは村長がこの辺りの地域の管理者か何かなのかもしれない。彼女はアシュレイに語った。『争いは何も生まない。今回のことでお前さんが一番それを感じたじやろうがな』と。アシュレイは深くは考えなかったが上を向いて黙っていた。

「何者だー!!」

「ワシじゃ……ウォルストラーだ。この者達は客人だ。弓を下ろしなさい」

「ウォルストラー様!! ご無事で何よりでございます!!」

「早速で悪いが……」

「お婆ちゃん!!!!!! 無事だったのね? 酷いことされなかった? 怪我はない?」

「おお、いいところに来てくれたな。この子がワシの孫のアンナじや」

「あの……お婆ちゃん? この人は? 新しい住民の人?」

「はじめまして。アシュレイ・オーガ・モノライナーだ。フレイア・アンナさんでいいのかな? よろしく」

「は、はい! こちらこそ!」

アシュレイは比較的容易にこの集落に溶け込んだ。ウォルストラーの命令で彼の出生やこれまでの経歴は聞かれない。ウォルストラーが助け出されたこともあり彼は街では英雄視されたのも影響しているのだろう。この村には先ほど述べたように差別から迫害を受けたり種族が少なく自治ができない民族や世の中に見捨てられたあぶれ者、都や街で生きていくのが疲れた者など普通に街やその郊外で生きていけない人々が集まってくる。その種族は様々になりウォルストラーを筆頭に村の創設時から数の多いデミヒューマン。彼らは人に似ているが寿命はその三倍以上で比較的知能が高いらしい。次に龍人族。特殊な魔法が使えることと体の一部に龍紋がある以外は

彼らも普通の人と大差はないようだ。大まかにはこの二種族だが他にも少数派の魚人や獣人、精霊族などが軒を連ねる村で仲良く暮らしていた。人もなかなか数がいて元奴隷だった者もこの街では差別されずに暮らしている。ここでは大きな森に村が点在し単位的な自治区ができていろいろな場所に種族ごとではなくバラバラに住み結婚も自由。そのためかハーフラしい子供も見受けられた。アシユレイには獣人族の皆がもてなしをしてくれ他にもたくさんの種族がウォルストラーの屋敷に集まっている。

「ほう、なかなかやるんだな！ お、おっと！ いい飲みっぷりだねえ！」

「ははは……このような席にまで招いていただいてありがとうございます」

「勘違いしてるね？ アシユレイ。この宴はワシを助けてくれたお前のためのものなんじゃよ」

「こういうことは初めてで……」

「アシユレイさんはこういう経験がないんですか？ ここは仲間が増えるといつもこうですよ」

「ええ、まあ……我々は戒めと共に生きる種族『番人』ですから。皆、質素に暮らしています。そのためこんなことは祝言以外はありません」

「失礼にならなければ……」

「こら！ アンナ！ それは聞いては……」

「いえ、皆さんになら告げても問題ないでしょう。アゲレイア付近は天の門があり我が一族はそれを人から守る使命を帯びていました。そう……俺はアークオウガです」

「気にすることはない！ 俺たちここの住民は寄せ集めみたいなもんさだからな。あんた一人が特別なんて思わねえよ。そら！ もう一杯いきな……」

それから歓迎会がお開きになるまで1日中宴会が続き彼が故郷に帰るにしてもまだ体調が万全ではないため体調が落ち着くまではまだ誰もいないログハウスに住まうことになった。月が美しいその夜は静かだがやはり隠れ里は人に見つかってはならない。アシュレイたちが来たときもそうだったように数人の戦闘のできるメンバーが警戒している。そんな夜は空気が張り詰めるため慣れないらしく眠れないようでベランダに出て星や月を眺めているのであろう。そこへ軽やかな調子で木の太い枝を渡ってアンナが現れた。彼女は村でも指折りに身体能力が高く木に登ることくらいなら縄梯子や普通の梯子を使ったり普通に木を登ったり枝を渡って来たりした方が早いようだ。見る見るうちにアシュレイがいる木の天辺に登りきりアシュレイの横に膝を抱えて座った。アシュレイは一度、彼女に視線を注ぐが彼女が反対側を見たので星空に視線を戻し眺め始める。アシュレイの瞳は虚ろでどこを見ているのかはたまた見ているのかすらわからない。銀色の髪は風にゆれ美しさが醸し出されるがアンナが感じたのはどことなくでている悲哀の表情だった。一度ためらったようだが勇気を持って小さな声で言葉を告いだ彼女。アシュレイはアンナより一回り程大きく髪と瞳の色を合わせれば兄妹のように見える。

「アシュレイさんはこの村に残らないんですか？」

「故郷に帰らないといけないからな。俺はその責任を帯びて生まれて来たんだ」

「そんなに大事なことなんですか？ その、天の門を開けさせないことが……」

「俺が一概には言えないが……天も地も開けてはならないのさ。ヘブンズゲートの向こう側には人よりも既知に優れた翼のある者達が……カオスゲートの向こうには人よりも力に秀でた者達が……。それらはこの大地にいる人より数倍優れている。だが、人は愚かだ。内輪もめで幾万の命が失われ闘う者達以外にも罪なき人が死ぬ。その

愚かさは俺達にも言える。ゲートを開けさせないために何人も人間を殺しているからな。ここに居たいのはやまやまだが俺の職務は俺にしかできない」

「あの、その話を聞いてからなんですけど……結婚とかって」

「ウォルストラーさんに何を吹き込まれたか知らないが俺は故郷に帰るつもりだぞ。跡目はどうするんだ？」

「じゃ、じゃあ連れて行ってくれませんか？」

「最後の質問の答えにはなってないぞ。俺に勝てれば問題ない。そうでなければ足手まといになるだけ……無駄に命を落とすことになる」

「え？ 武器はありますか？」

「ああ。それくらいいなければ俺に勝とうなんて無理だ」

「わかりました。挑戦します」

「そうか……」

アシュレイはアンナと話して気が紛れ、眠気が出始めたのか彼女に『お休み』と言ってからログハウスに入りベッドに横になった。すぐに寝付いたらしく窓から姿が見えなくなった。彼も不思議な男だ。アンナも木から木へと飛び移り彼女のログハウスに入って行った。入る前に一言呟き彼女も眠りにつく。それに答えるようにざわめいた深い森は樹齢2000年以上の大木が集まる天然の城塞だ。この集落はその木々に守られている。平和な夜は明け、日の出と共に街の人が各仕事場に集まり始めた。仕事を始める時間のようだ。

「お休み」

「あ、え、うん」

軽やかな足取りで太い幹に足をかけて次々に飛び越えて行く。彼女のログハウスに着くと……。次の日の準備をし眠りについた。

「絶対に連れて行ってもらうんだから」

仕事を始めようとしていた人々が地震のような揺れを感じてそちらに急ぐ。その騒ぎは周辺の集落の人々まで集めてしまいかなりの大騒ぎになった。最初に到着した人々の一団が見たところはアシュレイがアンナを押し倒したような構図に見えたが、そのアンナは後ろに飛び退き木製の長い棒を振り回しアシュレイに繰り出す。しかし、それはすべて独特な体術を使うアシュレイに流されあまり効果を上げない。次に繰り出されるアシュレイの攻撃はアンナに直接当たらないにしてもかなり威力がある。たまたまその内の一発が地面に打ち込まれ小さなボウル状の穴ができ地響きを起こす。

「はっ！ やあー！！ これでどうだー！！」

「……速さはあるが精度が悪い。これでは俺に武器のリーチがあれば死んでいるぞ」

「ヤバイー！」

「はっ……」

そこにウォルストラーが現れた。二人を一喝して止めるとアンナを叱りつけ始める。一通りの小言が終わる前にアンナが泣き出し口グハウスの方に走って行ってしまった。アシュレイはウォルストラーに事情を説明しこの集落以外の街の人々が帰って行くのを見届けたあとにウォルストラーの屋敷に入って行く。この森の村や街は産業も静かで畜産や農業を主に行い河での漁業なども細々とだが行っているのだとか。最近は石炭を使った蒸気機関や古代の異物を使った工学などが主流だがここは昔ながらの産業で自給自足を営んでいるのだ。

「アンナ………いったいどうしたと言っんだい？」

「アタシ……アシュレイと一緒に居たくて……」

「それとこれとは違う！　どうしてアシュレイを戦わせた？　こいつはまだ……」

「ウォルストラーさん。これは俺の……」

「アシュレイは黙っていなさい。いいかい？　年頃の娘がこんなことを……これアンナ！　待ちなさい！」

アンナが走り去ったあとは歩きながらことの起こりを話し始める。アシュレイは服をもらっていたが早朝のトレーニングの最中だったのか上半身に衣類はつけていない。ウォルストラーの小言は体調が回復していないのにトレーニングなどをしたアシュレイにも向けられ彼は素直に聞いていた。その後は開けた集落の集合場所らしき広場を抜け奥の大きな屋敷に入っていく詳しいことの起こりや状況などを伝える。

「ことの起こりは何だ？　アシュレイ」

「責任は俺にあります。昨日の夜は眠れず……アンナが現れた時に『連れて行ってくれませんか？』と聞かれた時に俺は自分に勝てたら連れて行くと言ってしまっ……」

「そうか……だが、あの子も聞き分けがない訳ではないからな。頭が冷えれば帰って来るだろう」

「彼女のことはよく知らないのでよく解りませんがそうだいいですね」

「変なことを言うな……そんな体験があるのか？」

「俺は妹を搜索発見したときに軍と接触して戦闘になり今に至りますからね」

「ほう……それはなかなか災難だったな」

それから数時間して面倒な展開になった。アンナが街の中で捕まったという情報が舞い込んだのだ。その直後にアシュレイが疑われたがずっとウォルストラーの家に居たと使用人と彼女が証言し罪は

なし。だが彼はウォルストラーに言伝を残し村が発見されないように森を迂回して街の外部から内部に敵の軍が構えていることを全く気にせずに突っ込んで行く。武器は持たず防具もない。体術でも大体の兵士には勝てるが冷静に見えて責任感や正義感が強く頑固な彼はいくら不利でも頑として決めたことは曲げない質なのだ。もう、誰にも止められない。

「救助に行きます」

「わかった」

「では……」

「待たんか！！ 武器も無く……無駄か。あやつもせっかちなヤツじゃのう。だが、止まらんか。シュリーよ……お前の孫はお前に似たようだ」

要塞に続く一本道を相当数の兵士が固めている。だが、それを物ともしないアシュレイの攻撃に一個大隊がほぼ壊滅状態に陥ったのだ。大隊を4分の1に分隊し防御隊、石弓兵隊、突撃攻撃隊、槍隊の順に別れアシュレイに石弓を放つ。石弓は直線に敵を狙う銃のような弓だ。それは矢をつがえるのに時間がかかるが威力は桁違いだという。アシュレイはそれを屈んでかわし弓をつがえさせる前に防御兵団の構える大盾の壁を飛び越えて得意の格闘技を使用し八割を叩き横隊を組んでいた彼ら石弓隊は壊滅。その後ろからはナイトの攻撃隊が大振りな剣や片手斧を振り回し攻撃してくる。

「石弓隊か……面倒だな」

「全体構え！！ 引きつけろ！ 放て！！」

身のこなしが軽いアシュレイの動きで近接兵も弓兵でさえ次々に殴られたり蹴られたりする。そして、吹き飛ばされ気絶するようだ。斧を振るう戦士や大剣を振る戦士、どちらも鎧に大きな拳のあとを

作ってはね飛ばされることをくりかえしている。だが、多勢に無勢であり体力の面では完全に回復している訳ではない。そこに後方から馬の蹄の音が響く。アシュレイが見たのは紋章のついた騎士団を率いたシドだった。剣を突き上げ突進してくる。

「若様！ まだ後戻りはできません！！」

「さっきも言っただろう！ お前達は自由だ。俺と共に戦うも俺を狙うもな！ 俺はこんな馬鹿げた王の元では働けない！ 父さんが信じた男を俺も信じたいだけだ！！」

それはアシュレイが前衛隊に攻撃を仕掛ける数分前。以前にアシュレイに父親、アトモスの命を奪われたシド・バトラー・アトモスは父の代わりに第二部隊の隊長をしている。本人も奴隷収容所でアシュレイに敗れておりその結果から落位と部隊の指揮権の縮小などを言い渡され今は第二隊になりアシュレイを待ち構えていたのだ。彼は悩み……悩んだ末に決めていた。まだ若いがつしりした体格の彼は威厳にこと欠かない。そして、技量も父のアトモスを超える物を持っていた。人望もありなかなか居ない逸材だろう。そんな彼もまだ若かったのだ。人は誰しも迷うものである。

「俺は父さんを信じてみたいと思う」

「は？」

「国旗を燃やせ！ 今の王には愛想がつきた。これからは俺が信じた男に尽くす。お前達は自由だ。俺は前の隊を攻撃する」

「わ、若！！」

この経緯を経て今に至る訳なのだ……。隊に居た誰よりも速く駆け抜ける彼はアシュレイの近くで守るように剣を振り戦った。その後も味方だった騎士はシドに誰一人として逆らわず前衛隊はアトモス隊の攻撃を受け壊滅し石造りの太い道で彼らはアシュレイとシド

の話しを聞いている。アシュレイは最初は少しとまどったようだがすぐにこわれるままに周りに指揮を出し動き出した。石造りの街道を進んだ先にある要塞の前には魔導師部隊がいるらしくシドと率いる数名がその対処をするらしい。騎士団は総勢二十名。加えてシド本人がいる実力順に整列し馬から降りるとアシュレイの指示とシドからの間接的に伝えられた詳細を受けてもう一度馬に乗りなおし命令された地点に分かれていった。

「お前……自分のしたいように出来たのか？ シド……」

「出来たよ。あんたのお陰でな。アシュレイ……これからはあんたにつくそう。指示をくれ俺達も動くから。何か卑怯な手を使っておびき寄せられている感じもする。とはいいつつあんたは死なないだろうがな」

「なら、さっそくだが……これから二人を救出するのを目的に前方の要塞を攻撃する。攻撃するのは俺一人で十分だ。ここで防衛をしていてくれれば問題ない。さっき伝えてくれた奥にいる魔導師部隊は俺が来たと解れば攻撃をしてくるはずだ。できれば騎士を二隊に分隊して第二部隊を壁に向かわせてくれ残兵が向こうに逃げるのを防ぎたい。ここに居るのは一流の騎士のメンバーだろう？ なら、止められるはずだ」

「中間地点の防衛なら俺だけでいい。父さんから貰ったドラゴンキラーとイージスがある。それに俺だけ居れば問題ない」

「若様！」

「もう、いい。俺はこれから若じゃない。シドだ。俺はこれからこのアシュレイさんの下に付く。何度も言うがお前らは自由だ。そのままでもいい。騎士を続けるなら誇りを捨てるなよ。家族を……自分の意思で剣をささげた者にだけ命をささげるんだ」

「若……いえ、アトモス殿。我ら騎士団一同これまでの恩は忘れません」

「ああ、行くぞ。己の誇りに賭けて愛する者を守れ！ 力の限りな

「は！！」

シドとアシュレイが走りだしかなりの勢いで攻撃を開始する。攻撃というよりは蹂躪に近いが魔導師部隊の攻撃はシドが回避をしてくれた。既に構えていたらしく火の玉が乱れたタイミングで飛んでくるからだ。彼の持つ盾のイージスあらゆる物理的事象の絡んだ攻撃をはじき返すことができる。それでアシュレイに向けられた魔法攻撃を完全に無効かさせてくれたのだ。それどころかシドの近くに居た魔導師などは跳ね返された火の玉で火だるまになり焼け死んだ者までいる。

「早く行ってください！　ここは俺が抑えます！」
「解った！」

味方同士に攻撃が当たらないようにまばらに組んでいる陣形の中を恐ろしいまでのスピードで駆け抜け最後尾に居る魔導師の振った杖をかわし空中に身を躍らせ金属製の大扉に強力な蹴りを撃ち込み扉を壊して警備の兵隊を次々に撃破するアシュレイ。階段を上り大きな部屋に入るとすぐにアンナの声が聞こえてくる。瞬間的にアシュレイが動き、かすり傷程度に抑えたが後ろからの攻撃には気付けなかったようだ。背中に大きな切り傷が入るもそれを気にすることなく彼はその犯人と向き合う。大きな剣を構えているのはこの城の主だった。その男はうつろな視線を彼に向け焦点の合わない光のない瞳をせわしく動かしている。何かを警戒しているのかそれとも何か他の事象が彼に起きているのかは解らない。だが、アシュレイは拳を構えている。

「お前がアトモスを殺した男か……」
「俺は騎士アトモスの意向に沿っただけだ。お前はここの統治者と

しての誇りはないのか？ いや、人としての誇りも無いのか？」

「ほう、奴隷の収容施設から多くの奴隷を解放し今この統治者に説教するとは立場の知らない子供だ。わしはこの国の王だぞ？」

「お前は今ここで殺しておくべきだな。完全に闇にのまれている。お前……自らの魂を闇に売るとは」

「闇？ 何だそれは……命があるから人は失われる。天命を曲げて何が悪い！ 失う悲しみが貴様に解るか！？ このわしと戦おうというのか小童？ ほう……剣技でこのわしに勝つつもりか？」

「剣など持つてない。この拳で『輪』に返してやる」

「格闘でわしに？ 笑わせる！ ならばその体で解らせてやる。この新たな力を手に入れたわしの剣技を……その前に名前だけ聞いておこう。貴様の名はなんという？」

「アシユレイ・オーガ・モノライナーだ。ここで罪を裁いてやる！ 覚悟しろ！！」

「

アンナが絶句する中、部屋の中で恐ろしいスピードでの攻防を続ける二人。部屋は広いがこの二人が縦横無尽に動けばさすがにあらゆるところが壊れてくる。次々に家具をぶった切り吹き飛ばし大きな打撃や斬撃の数々が放たれ部屋が崩れ始めた。現在の形勢はアシユレイが圧しているが……。彼はウォルストラーの魔法でもたせているにすぎない。魔法が切れれば力量は半減し戦えるような状況ではなくなってしまうのだ。アシユレイはそうなる前にアンナにその部屋からの退避を告げ国王をひきつけて階下へ移動していく。

「ほう、なかなかやるな……しかし」

「ぐ……、ここで切れるとは……アンナ！ 俺が引きつける。走って逃げるんだ。裏側の出入り口から出れば見つからずに逃げられる！」

アシュレイは部屋を飛び出し剣の攻撃をかわしながら追撃してくる国王の変化に気づいていた。頭に乗せたクラウンの間にまだ発達段階だが角が現れ始めている。そして、顔の色がだんだんと青くなり人間から遠ざかり瞳の色も赤くなり白い部分が浸食されていき、さらに変化が進み一回り体が巨大化しごつごつした人間ではありえない筋肉が現れ始めた。剣はそれに当てられたように歪な奇妙な形に変形していく。もはや人の域を超えたのだ。

「ほう、貴様……心臓を貫いたのに何故生きてられる？ この新しい力を受けたはずなのだが」

「俺は……人でないからな……まさかこんな所でこの力を使うことになるうとは……。俺がどうして死なないか見せてやる。お前の罪を浄化し人に帰してやる。『我は覇の執行人なり汝、罪人の魂を救う者我が体に力を与え彼の者の罪を洗え……』」

部屋を飛び出し廊下にて攻撃をぶつけ合いは続く。敵は恐ろしい速さで攻撃をするようになり始めた。何らかの秘術を使っているように感じられる速さだ。アシュレイはウォルストラーがかけていた一時的な回復魔法が切れてしまい動きが鈍っている。弱っているのは彼だけではない。要塞は堅固な作りになっているが最上階にアシュレイが向かうまでにかかなりのダメージを受けアシュレイが国王をひきつけて無茶苦茶な速さでこの城の主が剣を振り回しアシュレイがさらにダメージを与えたためいろいろな箇所で崩壊が始まりつつあるのだ。その頃、アンナはシアン姫に助けられていた。シアン姫はドレスではなく動きやすい服装をし後ろに侍女を二人侍らせてアンナと共にアシュレイが国王と戦っている場所を避けて裏側から逃げ出していく。

「あなたは？」

「私はリム……元この国の姫。誤解はしないで私はあの男の本当の

娘じゃないの。行くわよ！」

「えー！！ アシュレイを助けなきゃ！ 今反対側に……」

「止めなさい！ 巻き込まれて死ぬのがおちよ！ 早く外に出ないと私たちだって危ないの！！ 手の縄を切るから全力で走って！」

「わかった…… きつとアシュレイなら」

「ええ、私が初めて見初めた相手がそんなに簡単に死ぬ訳ないもの」

要塞の前方には魔導師部隊を指揮していた比較的長身の少女とシドが渡り合っている。かなり強力な攻撃型の魔法を空中から放つ。そのために展開陣と呼ばれる図形を手で描きそこからプレスと呼ばれる波動型の属性魔法を打ち出すのだ。シドはアシュレイの時のように盾を使いそのプレスを弾きながら攻撃をするチャンスを得ている。周りの魔導師達は二人の応酬に巻き込まれてほぼ全員が死亡していた。二人は親の代からの知り合いで幼なじみに近い。そのため性格や攻撃の方法、癖などをすべて熟知していたのだ。

「菱の攻陣は煌き！ 白き刃よ我が剣となれ！ アイスプレス！」

「くそう…… 一発が重いな。イージスよ我を守れ！」

「これでは魔力の無駄……。シド…… 頼むから止めないか？」

「無理だ。俺は今の王についてはいけない。俺には守る家族などないからな。命をかける必要がないんだ。俺は主のために剣を振り盾を構える」

「その決意……。だから……。あの男に剣を預けたのか？」

「そうだ。お前ならわかるはず……。無駄に血を流しすぎた。奴隷などと言い踏みにじった命は帰らない。俺は父さんを信じたいんだ」

「私も……。な、何！！」

「要塞が揺れてる！！」

「…… 姫様！！」

「一時休戦だ！！ 今は姫とアシュレイ様を助けるために行くぞ」
「わかった！！」

国王は恐ろしい物を目にしたように剣を取り落とし後退りした。そして、アシュレイは一撃で国王を殴り殺し姿を元に戻した。するとシドと少女が走り込みアシュレイが天井を見て退避をする就叫んだが一瞬遅かったようだ。石造りの要塞が崩れ始め三人は生き埋め状態になったが何とか生き延びたようでアシュレイに守られた例の少女は気絶していて動かない。シドも幸い重傷にはならず体は動くらしい。アシュレイは体に鞭打つ形になるがそうしなければ酸素が足りず死んでしまうのを待つだけとなってしまう。シドと二人で岩を退けるが触れば崩れてしまいそうな場所が多く、だんだんと手詰まりになりなかなか作業は進まず息が詰まるばかりで進展を見せない。その数分後に崩れた要塞の方向に馬を走らせていた元アトモス騎士団が現れ強力して岩をどけ救助をし終えて介抱をしている最中にアンナとリムが合流してとりあえず言霊の樹街に運び騎士団の護衛のもと三人の意識が戻るのを待った。重症度はアシュレイが一番高いが命に別状はないとウォルストラーと医学に流通した住民が告げている。

「ん……んう……こ、ここは？」

「起きたか……まったく、無理をしおって」

「ウォルストラーさん。俺達は？ いったい……」

「先に起きた騎士に感謝おしよ。あの男の人望のお陰でお前さん達は救われたに過ぎん。特にその少女は何者なのじゃ？ 竜紋があるのに大きな龍人族は知らぬぞ……」

アシュレイが起きたかことを降りて行った先ほどの住民から聞きつけ二人の少女が別々の方法で彼ともう一人の少女が寝ている部屋に入ってきた。アンナはベランダの大窓からリムは普通に梯子を登りドアから入り……ほぼ同時にアシュレイに抱きつかうとしてウォルストラーの魔法により空中で制止させられている。日差しが明る

いことから昼間らしい。1日空けてのだが……。背中 of 切り傷は完全に消失し胸を貫かれた傷が擦り傷のように残るのみとなっていた。

「アシュレイ!!」

「アシュレイさん!!」

「待たんか!! このお転婆ども!! アシュレイはまだ起き上がるのも辛い体調なのだ。あまり無理はさせるでない」

「はい」

「はい……」

「アシュレイ様。心配しました」

「いや、ありがとう。シド。君の騎士団に助けられたようだ。いきなりだが……彼女は何者なんだ？」

「アシュレイよ……お前さんは知らずにかばっていたのか？」

「そうなりますね」

アシュレイが言葉を告ぐとシドが兜を置きアシュレイを含め皆に話しかけた。彼は彼女の幼なじみのような存在なのだ。知っていて不思議はない。その少女は美しく綺麗な容姿をしていた。それこそ絶世の美人と言える程だろう。その少女は額を数針縫ったが命に別状はないらしい。シドの説明が終わると数分後に目を覚ました……。

「彼女はグングニル・イオーサ・ケイオス。この辺りでは珍しいかもしれないが普通の龍人とは違う種類の変身できない人に近い龍人です。彼女自身は孤児で身よりもなく放浪していたのですが我がアトモス家と双対をなすグングニル家の奥方が養子に引き取ったただい……」

「……ん……、ここは？」

「三人そろって『ここは?』ってどういうことかしらねえ？」

「イオーサ……起きてはいけない……」

「助けてくれた方にお礼を……」

「俺は横に居る」

「は……その節はありがとうございます。私の本名はイオーサ・ケイオス。階名はありません」

「いいのか？ イオーサ」

「問題ない……私はこの人について行く」

「おいおい、いくら俺がここを出るとは言っても……」

「皆付いて行くつもりですよ。アシュレイ様」

「その様はよしてくれシド。しかし、厳しい旅になるぞ？」

ウォルストラーが会話に割って入りこれからのことについて話してくる。アシュレイが立ち上がりこれからの目的を再確認しあうことを最初にした。ログハウスの中で円を描いて座り外の騎士団の代表やウォルストラーを含めた皆と話をするのだ。広くはないが話す程度であれば問題ないのである。樹街の住民たちも『下の住民』と呼ばれる彼らがここに来ることは珍しく外に集まる。

「で、お前たちはどうするのだ？ アシュレイは故郷に帰ると前から言っておったが」

「アタシはアシュレイについて行く」

「俺も付いて行きます」

「私も帰る場所がないので付いていきます」

「……付いて行く」

「我々騎士団はここに残り彼らの街の防衛に尽くしたいと思います」

「ほう、それは嬉しいな。街の住民も喜ぼう」

「ついては我々の家族を皆ここへ移住させてくださいませんか？」

「ああ、すぐに呼び寄せなさい」

「そうなるといういろいろ準備が必要になる。俺は問題ないが特に女の子は……」

「アタシは野宿好きよ」

「野宿ですか……我慢します」

「私は……旅には慣れている」

「決まりですね」

「ああ」

「アシュレイよ。お前には感謝しきれん恩もある。このお転婆の孫も助けてくれた。新しい仲間も増えた。奴隷にされていた我々の仲間も解放してくれた。礼のしようもない」

「気にしないでください」

その後シドとイオーサがアシュレイに問いかけてくる。国王がどうして彼に一瞬で勝てたかを聞いてきたのだ。シドはあまり詳しく知らないようだ。イオーサが詳しく語ってくれた。外に出てからそれを語られた。それからアシュレイの一族の話をしてくれたのだ。その方法は実に美しくまた優雅に長い時を皆から忘れさせてくれた。

「あの王が魂を弄ぶ過去の秘術を使っていたことは私もよくは思っ
てなかった。原因は王妃と本当に血のつながった王子と姫の死です。
これが立て続けに事故、戦、病で家族を失った彼は運命を呪ったの
でしょう。だから言って使っているものと悪いものは存在し止めな
ければならなかったのです。しかし、反対はできない立場ゆえ最大
限の抵抗をしていたのですが……。最終的には我々にも奴は秘術を
適用しようとしそれに失敗し奴は本当の闇にのまれた」

「まさか、オウガの秘術を使っていたのか？」

「はい、少なくとも私が知識として知りうる技は解りました。しか
し、それを止めることはできなかった」

「生贄は何人だ？」

「多数というこ意外の情報は解りません」

「そうか……」

「ねえ、そのオウガって何なんなの？」

「そうですよ。俺達にも教えてください」

「ふむ、お前らの世代に口伝えられていないのか？ それならアシュレイ。お前の意思で構わないが皆に教えてやってくれないか？」

アシュレイの次の言葉を聞いた皆が絶句したが周りの付いて行くと決めた仲間がそれらを手に取りアシュレイが地面に描いたものを見てそれらを操り始める。大きな見物客たちの波が老若男女問わず次々に現れた。いい機会だからと各集落の人々をこの中心の村に呼び寄せたのだ。ここは木漏れ日が綺麗なホールのような形をした集会場だった。野外の祭りはここでもいつも執り行うという。

「俺も……記憶しているのはメロディーと譜面のみです」

「ほう、どうやって記憶しているかと思えば……そのような方法があったとは」

「我々一族はあらずじしか伝えられていませんそれでもいいなら……ここで語りましょう」

使われたのは楽器で弦楽器が主体の滑らかなメロディーだった。アシュレイの歌が響きわたる。テナーの美しい声が節を付け流れていく間は誰一人声を出さない。前から静かな森だったがさらに静かになる。聞こえるのはアシュレイの歌声と滑らかな弦楽に合わせるようにざわめく木々の声と時折木のうろに風が舞い込む低い笛を吹いているような音くらいだ。

「『覇の起こされし夜の果てに我らは力を持ち生まれた。』

我ら天より現れし者と地より現れし者の血を受け心を満たす大地の中で我らは生きる。

神戦の終焉……我らは置かれ戦いし敵は意志ごとくうつしないて互いに手を取り門を封じる

千年の時を経て我らは守る力を封じ『人』と共に心通わせ大いなる扉の封印を解かせぬために力付くした

再び戦の起こる時、我らは古の力を解き放ち鬼と天使の力を示す。
新たなる“覇者”を生む

我らは“覇者”となりこの世に新たなる指導者として現れる。

夜は流れ我らは再び現れる鬼と天使は災来の兆し

新たなる“覇者”はその兆しと共に現れその力を放ち終わりを迎え
新たなる始まりを迎える

我らは新たなる時の使者として死を望みまた新たなる時を作る『』

拍手喝さいの中、アシュレイが立ち上がり頭を下げさらに大きな拍手が湧きおこる。他の四人も嬉しそうに向かい合い和やかな空気が流れるがその直後に歌詞の内容に疑問を抱く子供たちが現れた。確かにそうだ。最後の一節には『覇者は死を望む』という言葉がアシュレイから出ていた。ということは伝承の通りにいけばアシュレイはその覇者の素質を持ちそして、彼は最終的に死を迎えるということになるのだ。

「ねえ、ママ。あのお兄さんは死んじやうの？」

「え？」

「だって最後にいつてたよ。『死を望むって』」

「そういえば……」

「そうだ……なんで、一生懸命戦って平和を取り戻したのに死にたがるんだよ」

「そのことについてだけ。皆さんにも関係するのでここで語りましょう」

「ほう、お前は記憶はしていないと言ったが？」

「これは伝承ではなく我々が戒める事の一つです。」

『界を尊び世を尊び輪を尊ぶ生命がこの世にある限り務めよ。

覇者なれど命ある者としての理を崩さず。

その生を全うし生きる事の美しさを保つ。

我ら古の血より大いなる言の葉をもって伝えること』

意味を簡潔に説明すればこの世界……つまりは天界と地獄、そして、ここ大地の三つ全てに存在し世とは時間、代を重ねることを続ける。そして、生き物として輪廻のバランスを崩す秘術を使用してはならないということです。最後に、己の命を切り詰めず全うすることが生きる者の権利であり義務であるということというのがこのはなしの趣旨と言えましょう」

周りがざわめきアシュレイの隣にいたアンナは首をかしげ同じくシドもいまいち理解ができないというようなあいまいな表情を見せた。外側に居たイオーサはこれですべてを理解したという言葉を噛みしめたおごりかな表情をしリムも同じように堅い表情を浮かべている。それから数時間して周りから人がいなくなり5人がアンナのログハウスで今後行きたい場所の話しあい始める。主に知識に富んだイオーサが簡易の地図を作製しアシュレイの記憶を頼りにたどるといふかなり曖昧な状態だが今はこれしかない。それにまだアシュレイの体や他のメンバーがするべき準備も整っていないからだ。

「とりあえずアシュレイさんの故郷に向かうのは確定ですね」

「誰かアグレイアの付近の知識がある人間は俺以外に居ないか？」

「私の生れは南ですから……」

「アタシも生まれも育ちもここだし……」

「それは俺も同じです」

「私……知ってる。私の故郷は最果ての地」

「そういえばイオーサが珍しく饒舌だったな」

「そ、そんなことない」

「そうか？ どうせまた例の『愛しています症候群』じゃないのか？」

「それよりも教えてくれ俺が知るのはその近隣の山道と狩りの方法くらいだ」

「解っています。早く立ちましよう」

「決まりね。アシユレイの体調が回復し次第だけどさ」

「確かに、傷は癒えていてもまだ回復はしきつていないとウォルストラーが言っていたことですし」

「解っている。俺も不死身ではないんだ。死にもするからな。死ぬ時は事をやり遂げてからではないとな」

たわいもない話をしながら療養がすみ旅立つ日が来た。整列する騎士団や前に出て見送る街の各代表達。その裏にはほとんどの民衆が集まり盛大な出発になった。旅に出る者たちは不安や希望を胸に歩いて行く。アゲレイア山脈は世界で一番高く高地面積が最も広大な山で有名なところだ。そこへ歩いて行くのだからそう言った感情も芽生えるだろう。彼らはまだ“覇者”とその仲間としての道を歩き始めたばかり。彼らがどのような道を歩むかは解らない。だが、無限の可能性を試すために脚を進める。これから……ゆつくりと未来へ向かって。

歩旅……『旅路とは命紡ぐ道筋なりて省くことならぬ道なり』

新たな道へ進む時、彼の者らは惑うだろう。

覇を持つとて彼の者らも人にあり。

されど、覇を有する者は力を有しまとめ……抑える業の許に小さき力を大いなる物へと膨らませる。

それに付き共に歩む者はより強き人となりその者と強き絆で結ばれん。

生きる道は時の進む流れに押され樹木の枝葉に似た運命はどの人、世、界、心、生においても惑いを生むことは輪の理。

天地開界のおり、大地に残されし者を探し歩むも覇、また新たな心を開く者も覇となりて己の思うが道を歩み続ける。

人としての道を尽くせぬ者は覇にいたらず散り黄金の道を惑い。逆を見ても銀の道にのまれ先の見えぬ生に大いなる惑いを被るだろう。

されど、道を終えし覇の姿ここにあり。我が答うる所、道と形に修める後ろの人と空を見る。

そして、無形の先を生としてたどり生きる者こそ覇なると……。後となる覇、史より告げる。

惑いの覇者……ヴィルゲイ・セサンス・オーグラン

アシュレイ一行は険しい岩場の道を歩いていた。旅を続けるうちに皆はアシュレイの知識と完全に回復した体機能に驚きを隠せないようすである。出発点の『言霊の樹街』を出発して数日がたっているが人里は見えてこないようで遠距離の旅をしたことのないアシュレイとイオーサ以外の三人はだんだんと苛立ち始めているようだ。今は切り立った岩場にいてかなり危険で経験が豊富らしいアシュレイが周りに注意をしていた。風化により削られた石英やケイ素を多く含む岩肌は地形の特徴なのか場所によっては剣山のように突き出ている。その上部にあり今、アシュレイ一行が居る足と手をかける

のがやつとの切り立った場所から転落すれば助かる道はないだろう。他の旅人がその運命を辿ったらしい骨が近くに散らばり食糧の少ないこの岩場では生息する生き物にとっては神の恵みなのだろうか野犬や鷲などもみつけられる。もちろん野生動物である彼らとて例外ではない。アシュレイ一行に関して言えばシドは重装大鎧が守ってくれるであろうことから即死は避けられるだろう。だが、残りの4人はそのまま落ちれば死ぬ確率は高い……いや、もろに落ちれば即死で決まりだ。皆がわかっていてしきりに身構えるたまに吹く強風に煽られるという時が怖いことは言うまでもなく彼らは細心の注意を払っていた。その時、長い魔導師のローブを着ているイオーサが強風に煽られ、こともあるうに剣山の上に投げ出されてしまった。掴んだ岩が崩れ真つ逆様に落ちていく。それに反応して落下とほぼ同時にアシュレイが空に飛び出し背負っていた槍を地面に向けて突き出しイオーサを片腕でしっかり抱き抱え地面に槍を突き刺し、それを支えに垂直に加え逆さまの状態になって間一髪だったが……最悪の状態を避けているという構図だ。体をゆっくり真横に倒し注意深く剣山の刺と刺の間に上手く入りイオーサを怪我をさせないように降ろした。

「う……風には気をつける。お前らが落ちれば命はないぞ」
「そんなこと言っても……岩肌が脆くて」
「くそ、案外厳しいな。……俺は鎧があるからいいけど」
「……え？」
「イオーサ！ くそっ！」

イオーサのローブは打撃から守るためか余裕があり幅広で長いため風をよく受ける。それに追い打ちをかけたのは彼女の体型だ。彼女はローブを着ているとわからないが実は体が細身で軽いため浮きやすい。スタイルは良いが体重がかなり軽いせいで簡単に浮いてしまい岩を掴むことは何とかできたようだが藁をもすがったその岩が

掴んだ瞬間に風化の影響で崩れたのだ。風化が激しくそれこそ卵の殻のように脆く割れてしまい強風に流され飛ばされる。これが彼女が体験した事象だった。その後はアシュレイの働きで彼女は助かっている。槍は完全に壊れたがイオーサの命には代えられないとアシュレイが申し訳なさそうな顔のイオーサを背負い、崖を注意深く登りながら話していた。アシュレイの体には数か所の切り傷があつたがイオーサには怪我ひとつ見当たらない。それも彼女には気になつたのかさらに申し訳なさそうな顔をしていた。

「うわっ!!」

「こうなるとは思っていたが……こんなに早いとは」

「アシュレイ! イオーサを助けて!」

「わかつている!!」

アシュレイが登り切り二人が無事なことを確認して、安心からか溜め息をつき座り込む3人を見ずにアシュレイは太陽を睨むように見た。だんだんと沈みゆく太陽を眺め近くの林を見てから後ろの4人に向き直つてここで野宿すると一言告げると小川の近くに日が沈む前に小枝を集めて火を焚くように言う……それを言つた本人は恐ろしく軽い身のこなしで森の中に居なくなつた。その容姿をパツと見ただけでは普通の人である『ヒューマン』と変わらない彼は人間とは全く違ふ体機能を持ち既知も高い。加え、彼は他にもまだ特殊な能力を持っていると彼自身が告げている。周りの4人がその生物的な違和感を感じるのはごく自然のことだ。

「アシュレイって凄いよね」

「うん……私は助けられた時……アシュレイが怪我してるのが見えた。怪我をすることを恐れていなかったようにも……」

「気にすることはない。本当に大丈夫だ。これくらいなら数時間で治癒する。それに……仮に心臓に穴が空いても今の俺なら死にはし

ないからな」

「それよりアシュレイさんは何をしてたんですか？」

「たき火は……よし、魚を取って来たんだ。ホントはもっと大きな物が良かったんだが……な」

「す、凄い……。そんなことまで」

「どうしてそんなことができるのですか？」

リムが問う質問が前者達の質問をまとめて居たため総合してその質問にすぐに応えている。それによれば彼は昔から旅を続けていたと言っていた。奴隷にされる前から言うことでかなり長い間なのだろう。奴隷と言えば彼は奴隷の焼印の上から大きな別の焼印を数種類焼き付けている。ウォルストラーに無理を言って頼んだようだ。肩甲骨の左右それぞれに『カオスゲート』と『ヘブズゲート』の封印の紋章が描かれ、背骨にそって六紋と呼ばれる同じく封印の紋章が連なっており、最後に鎖の蛇の紋章を隠すためアシュレイのシンボルマークという聖紋を描いた。背中を見せた彼に視線を移す4人を見ずに魚の焼ける香ばしい匂いがしてくると近くにあるキノコなどを見て毒キノコではないことを確認し串に刺してすぐに火を通す。そのアシュレイは白銀の髪を撫でつけながら一族の始まり以外の本人の出生まで語ってくれた。夕日がだんだんと落ち始める時刻アシュレイとイオーサが気にしていたのはモンスターだ。野生の野獣なら生易しく『カオスゲート』と『ヘブズゲート』の影響を受け生物が突然変異したものがそうだ。話を戻そう。旅をする中でアシュレイは彼らを仲間と認めたように他の情報も語っている。彼らはたき火を中心に丸く座っていた。魚を頬張る者や熱いたため注意深く歯を入れる者、キノコに手をつけたがまだ焼けていないとアシュレイに早いと止められた者。聞き方は思い思いだが視線と意識はそちらにある。彼らが視線を合わせる彼の目は独特で、瞳孔が広く大きな目をしているためか目だけは少し人とは違う。

「アークオウガは人間に近い種とはいえ古の昔からの『古族』^{いにしえぞく}だ。ルーツをいうならイオーサは俺に近い。アンナが属するデミヒューマンは精霊族と俺達の片割れである『エンジェル』のハーフだからな。また別に数えられるがわりかし血が遠いわけではないんだ。わかつてる俺のことだろう？ 生まれはアゲレイアの山村、父も母も戦士でな。俺が何故、旅に慣れてるかと言えば父に連れられて旅をし仕事を学んだからだな。一族の仕事とは別だが俺の仕事は暗殺や見せしめが多かった。山の聖域に近付く者は老若男女、種族を問わず追い返すか……強情なら殺す……」

「軍人の上層部で二つの門を開けようとする人を？ その他にも狩り人とか……まさか子供まで……？」

「子供なら優しく言えば帰ってくれるからいいんだがな。殺す部類は今の二つや考えられるそれらだけじゃない。あれは存在を知られてはならないんだ。本来ならお前達にも口外することは許されないが俺の目に狂いがなければならぬお前らになら話しても大丈夫だろう」

「それに関しては研究者から聞いたことがある。『……守勢の一族果てなく争いを拒み開かれざる門を守る。放浪の者、任を用い開かんとする者に鉄槌をくだす』と龍歴では伝えられている」

「大方当たってるが少し違うな。俺たちは『界印』守っていると云えばそうだが実際はこの大地に住む人を守っている。アレが解放され暴走すればこの大地は滅茶苦茶になるだろうからな。それに俺達は二つの門を守るだけだが使命ではない。この世界には残り六つの開けてはならない扉がある」

「みんな……注意して。アシュレイは気づいてるんでしょ？……何か近くに居ない？」

「アンナ、お前も気付いていたかイオーサは動きが早い。気づいたことを気取られるな。よし……ちようどリムの裏側だ。来るぞ！ 屈め！！」

襲って来たのは熊のような体に獅子のような鬣を持ち、前足が異

様に発達した奇妙な生物だった。そして、それは群れを成しワラワラと大量に森の奥から現れる。大柄な体格のそのモンスターにとっさにリムを守ろうと放ったイオーサの龍魔法が急所について当たり一頭目が倒れた。それを始めに次々に襲いかかってくる奇妙なモンスター達を倒しながら周囲を確認するアシュレイ。彼はそれらの対処の方法を知っておりリムとイオーサを後ろにかばいながらシドとアンナを促し連携攻撃を行う。アシュレイは今、使える武器がないため独特な格闘技でモンスターの腹部に拳を突き出したり、しなやかに振るった脚で蹴り飛ばして次々にたおす。シドはアシュレイに言われたように三角形の陣を崩さないように後衛二人の壁になる。ドラゴンキラーの剣で急所を的確に斬りつけたリイージスの盾で弾き飛ばしたりしながらアシュレイに合わせじりじりと前に動く。アンナの攻撃は機動力が売りの速撃タイプでアシュレイにパワーは劣るも長い棒を振り回し軽快なヒットアンドウェイでモンスターを押し返す。そんな彼女は本来のスタイルだけで見れば類い希な弓の使い手である。近接攻撃よりも遠、中距離攻撃を時折、その間合いが掴めると箆手弓と呼ばれる防具に仕込む小型の弓で眉間を射抜いていた。戦闘開始からかなり時間が経過したが今は誰も怪我をしていないらしい。アシュレイの指示で火をおこしている起点の利くイオーサの魔法が強く作用し周りの木に火が引火して燃え広がるのを見てアシュレイが動きを止めた。残りの4人もモンスターが逃げ行くのを呆然とみているらしい。アシュレイからの説明が入りイオーサが後処理といせ魔法を使って火を消してからその場を離れる。離れなければまた同じ群れに攻撃されるからだ。荷物と言っても最低限の調理器具と武器や消毒薬など救護関係のためかすぐにまとめることができた。

「な、なんで逃げてくの？」

「最初から使えばよかったんだが何分近寄られ過ぎた。……奴らはあまり知能が高い訳じゃないからな。火が怖いのだ。急いでここか

ら離れるぞ」

「また同じ群れに襲われないように……ですか？」

「そうですね。アシュレイさんの言うとおりだ。できるだけすぐに離れよう。荷物をまとめるんだ」

夜の旅は厳しい。『言霊の樹街』付近から出たことのないアンナは旅路に素人でリムも城から出ることが少なく同様。シドはけして旅をしたことがないわけではないが兵糧が確保された戦場での分隊作戦でのことだ……今のこの状況とは食糧確保や多数の観点で違いがある。イオーサは前にいた街に行くために旅をしたことはあるがそれきりでアシュレイ程の玄人ではないため不安さがあるらしい。唯一、周りを気にしているアシュレイの近くから誰一人として離れず言葉もでない。川沿いを歩くのは魚を捕った時に遭遇した水性のモンスターに再び出会う恐れがあるため避け、広い荒野と森のせめぎ合う間を歩いていく。その内にオアシスの村らしきところが見えてきた。後ろの4人は安心してため息をついたようだがアシュレイだけは違う動きを見せた。いきなり物凄い勢いで走り出し村に消える。その後ろを4人が追う。追いついた時には大方の方はついていたようだがシドは戦場での経験から血なまぐさいそれを感じ取り剣を構え猛進していく。アンナも野生児の感性の鋭さから気づいたのか惨状を見ないように女子三人で周りを警戒しながらアシュレイとシドを探す。

「どういうこと……」

「山賊に襲われたようですね。それにしても酷い……」

「リムの言う通りよ……誰！？ な、なんだ。アシュレイか……」

「山賊は粗方逃げたか俺が抹殺した。酷い有様だ。奴らの手口はわかってる今から……」

「アシュレイさん！ 無事でしたか……」

「ああ、俺は荷馬車を追う。シドはイオーサとリムを守って居てく

れ。俺とアンナの速撃で方をつけてくる。村の生き残りが居れば助けてやれ」

アンナが頷いて二人が走り出した。砂漠のオアシスではよくあることなのだ。山賊や海賊などから身を護れない街が攻め落とされ若い人や家畜を奪い金品に変える。それが山賊の手口だ。アシュレイも何度かそれに遭遇したことがあるとアンナに語る。アシュレイは速度をアンナに合わせていたが途中からその方が速いと彼女を背負い乾いた街道を走った。荷馬車は人を沢山乗せて居るためか速度は速くない。他にも原因があるのだらう、アシュレイとアンナが追いつくのには時間はかからなかった。アンナがアシュレイの手を足場にし大弓を構え荷馬車の上に居る弓を持った男を狙って矢を放つ。

「おら！！ 黙れこの奴隷女どもが！！ お前らなんかの代わりはいくらでも居るんだよ！」

「うう……いや」

「人間ぶってんじゃねえよ！」

「兄貴……頭に怒られやすぜ」

「そうだな。商品だ。大切に扱わないといけねえ」

衣類を剥がれた若い女性の奴隷ばかりを集めた荷馬車の上にいた山賊の男が綺麗に喉仏に命中矢を受けて息絶えたようだ。アンナはその荷馬車の上に飛び乗ると中の山賊を蹂躪し始める。こめかみに十文字を刻み込んで殺した男から奪った鞭を張りながらパシッと張り詰めた音を立て凄みの聞いた声を放ち山賊に詰め寄る。小柄な彼女だが本当に恐ろしい。彼女の裏の顔はこうなのだらう。一方のアシュレイは音もなく最後尾の豪華な馬車に近寄り中を確認した。のろろと走っていた理由はこれだ。中を見ればすぐにわかる。この山賊達はどこかの都市の貴族とつながり賄賂を渡して自分たちの所業を隠していたのだ。

「おいおい……お兄さんたちよお、人の命を何だと思っているのかなあ？ これ以上オイタをしないと……奴隷にしちゃうぞ（ハート）。おらあ！ わかったらこの子達を解放せんかのろまあ！ 早くしろこの下種が！」

「ひ、ひいいい！！！！……す、すみません。もう、もうしませんから！ お許しを……お許し……！！！！う、あああああああ！！！！！！！！！！」

何をしたのかはさて置き後ろのアシュレイの方に視点に移そう……。アシュレイは御者を勤める山賊を気絶させ縛り上げてから策を講じている。彼もただでこいつらを返す気はなく捕まえてそれ相応の辱めを持つてこの解決を図ろうとしたのだ。貴族の男はいかにもと言うような悪人顔で丸々太った差し詰め肉団子のような体をしており無視しておいてもあまり苦にならないだろう。問題は話しているであろう盗賊の頭だ。一度ここから離れ村に目を向けよう。このオアシスの土地は村と呼ぶには大きいが街と呼ぶには小さいと言うような微妙な大きさで人口もそれなりくらいあった。砂漠の真ん中にあるが農村で薬用になるらしいサボテンや南国の果実植物をオアシスの水を利用して育てているらしい。三人はアシュレイの指示通りに動いていた。村に残ったリムは意識のない重傷患者を彼女の魔法を使って手当てをしシドも外に警戒しながらも戦場で身につけた応急処置を施していく。イオーサは暗闇に紛れて物陰に隠れていた子供達を集め相手をしている。無口で表情の変化が少ない彼女が何人もの子供と手をつなぎ背中に運良く難を逃れた赤ん坊を2人背負っている光景を見たシドとリムの二人は緊急事態にも関わらず笑顔を作り吹き出しそうになりながら笑っていた。

「悔しい……こんなに沢山怪我人があるのに助けられないなんて」
「姫。ぼやかないでくれ。みんな頑張ってるんだから」

「私も……頑張ってる」

「い、イオーサ！ くっ…… はははっ！！ はははっ！！」

「ふっ！……ううん……」

「二人とも何が可笑しいの？ 何が……」

「不謹慎だった……さあ、やるか！！ アシュレイさんが言っただのって……このことなのかな。何だっけ？ 『惑いの覇者』の伝承って」

「わからないけど……そうだと思う。黄金は未遂の後悔を表し、銀こがねは救えない苦しさを表す。辛いけど偉人も通った道。どこかで割り切るしかない……」

「そうです。万変はこの世の常。惑いの覇者はそう伝えてる。全てが動くの……覇者はいつ現れるか解らないけど必ず言葉を残してる。彼が私達に話してくれたのは二人。何人の覇者が居るのかは知らない……だから、多分まだ、私達の旅は続く……アゲレイアについてとしても……一時の安息」

イオーサの意味深な言葉を聞いて二人は何を思ったのか知る由もないが何かを思ったはずだ。怪我人達には最善の手当てしたがすでに手遅れだった人も多く、あまり多数の命を救うことはできなかったように見える。布を被せ胸の上で手を組ませた遺体がそれだろう。シドは二人に休むように伝え救護所替わりに使って居る大きな建物で眠らずに番兵の役をする。イオーサは先程の子供たちに気に入られ彼女の周りにはかなりの人数の子供達が集まっていた。どうやらこの村は移民街でもあるようで毛色の違う子供達が多く伺える。リムは魔法の使いすぎで疲れて寝てしまっていた。そんな夜半過ぎの月の下ではアシュレイが今回の事件の首謀者二人を締め上げている。彼の攻撃は本来なら瞬時に山賊や悪徳貴族の命を奪えるだろうがあえて奪わずに辱めることで罪の重さは……解らないだろうがとりあえず山賊と悪徳貴族を奴隷のようにした状態で荒野の真ん中に離しておく。あとは村人に先を委ねるだけだ。

「で、今回は上玉は居たのか？」

「へえ、何匹か可愛げのあるヤツがいやすぜ。旦那も物好きですね。旦那の力があれば遊女くらい軽いんでしょう？」

「官位を落とさぬためには相応の伝を使わねばならんだ。民意というくだらん評価さえ関わらなければこんなことはせぬ。次期の推薦で昇格すれば貴様も我が家の騎士団の末席に加えるのだ。存分に働け」

「ありがてえ話だ。山賊なんてうだつの上がんねえ家業よりや……」

「それで？ 他人を不幸にしてその不幸から得た甘い甘い蜜をその汚い手口で蜜壺におさめて私腹を肥やし……官位を落とさぬようにか……。お前たち下種どもに手を出さなくてはならないとは……悲しいな。民もさぞ苦しかろう」

「どこだ！ 出てきやがれ！」

「だ、ただだ誰だ！？」

「今に教えてやる」

前の荷馬車では片がついていた。捕まっていた少女たちを解放したアンナは他にもある三台の荷馬車をあの状態のまままで猛然と襲い、山賊を捕まえて服を剥ぎ取り少女たちがつながれていた鎖につなぎ一つの荷馬車にまとめるという作業をしている最中だった。最後尾はアシュレイが張っていて二台目には酷い有様の男性の住民達が居たがそれを盾に抵抗しようとした山賊はやはり同様に息の荒いアンナの鞭を受けて絶叫して……その先は語られない事実が待っているはずだ。アシュレイに再び視点を合わせよう。何もためらうことなく馬車に乗り込み山賊の頭が振りかざした曲刀を指先でつかみ二つに折り曲げて落とし拳で山賊の頭の顔面を殴りつけた。その男は一発でノックアウトされ大量の鼻血を噴きながら座席に座ったまま前のめりに倒れた。恐れおののく悪徳貴族は……。アシュレイを買収にかかったが相手が悪い。どこぞの山賊ならいいのかもしれないが

……彼では全く意味をなさない。

「か、金が欲しいのか？ 金ならいくらでも……。それとも騎士の称号か？ お前の腕なら王立騎士団でもやっていけるだ……。ううううっうっ！！」

「言わなかったか？ 下種……。貴様から受け取る物などない」

アシュレイが振り上げた左の拳は馬車の木製の壁を突き破り外で村に帰る準備をしていた少女達や男衆の視線は一斉にそちらに移る。次の瞬間には悪徳貴族は顔に拳の跡を作って脆くなっていた馬車の壁を突き破り乾いた石畳の上に仰向けに飛び出した。アンナを含めその他一同は驚き何が出てくるか身構えたがすぐに気付いたアンナの一言とアシュレイの容姿でつかまっていた少女が集まり出す。アシュレイは困った顔をしアンナに助けを求めていたがことは動かずそのままの状態で村まで既に息絶えて手遅れになってしまった者達も含めて帰還した。その時には既に空は明るくなり日輪の端が山から見えているような状態で彼は懐かしそうにその方向を向いて一言つぶやいた。

「まったく……。こいつらにも罪の反省が必要だな。鎖につなげて……」

「アシュレイ……。派手にやったね」

「そんなことは大した問題ではない。ちょっと待て……。これはどういうことだ？」

「しばらくはそのままだよ。アシュレイの容姿からなそうなくても解らんでもないからね。あたしも参加しよ」

「アンナ、助けてくれ……」

「アシュレイはサバイバルには長けていてもこういうこと苦手なんだ。収穫収穫。」

「な……。おい！！ やめろ！ アンナ！」

乾いた道を馬と開いた荷馬車を使って亡くなった人を乗せて運ぶ。残りの皆と家畜はアシュレイに守られながら歩いているためかある程度は安心感があるようだ。朝日が見える中で村が見えてきた。アシュレイは近づいただけでわかるのかすぐに表情を変える。それに気付いたのかアンナが促し皆の歩く速度も少しだがあがりどんどん元居た村に近づいて行った。

『旅中に身をおく我、使命の傍ら美しきを目に焼き、我が故郷を思い、幾年離れたか我が故郷に日輪の端重なり我が心中感銘を受けここに詠い誓う。美しきかな遙かな山よ。いつか……時の来ようその時に帰らん。我が故郷アゲレイア』

ゆっくり語りながら静かな村に入ると協会らしき建物から怒鳴り声がする。山賊の生き残りらしい。アンナが持ち前の偵察力と運動能力を使い協会のほりに登り中の状態を粗方調べてきた。構図的にはシドが集中的にリンチを受けて体が動かずイオーサは子供を守るために前にいて出し抜けそうもない状態……。加えて肉弾戦闘に向かないリムが人質だ。あまり良好な感じではないように見える。中には山賊が六人いてその内完全武装の山賊は二人。残りは剣や鞭を持っているが防具はなく背後から斬りつければ一瞬で命を絶てるだろう。内部の状況確認をするとアシュレイがすぐに行動を起こした。落ちていた剣を拾い上げ先程アンナが協会と看板の付いた建物に入ったように高い窓から侵入する。作戦はあらかじめ決めてあり簡単な囮作戦がとられているようだ。敵は六人で軍人ではないため軍策など知るわけがない。それを上手く使いアシュレイの単体を含めば4つの分隊に分けて行う。まず、協会の出入り口を3つ塞ぎアンナを隠すように悪口を住民たちに言わせその中の数人に騒ぎ立てさせて山賊を怒らせて外に誘い出す。そこからはアンナの出番だ。彼女なら簡単に倒せるだけの实力がある。他の分隊も同様で間合いを見

てアシュレイがはりから飛び降りて山賊を倒す。

「く、こんな者たちに捕まるとは……」

「おいおい、嬢ちゃん惨めに聞こえるぜ？　どこの出身か知らねえが頼りの騎士様はお寝んねしちまつてるしな」

「ふざけるな！　アシュレイさんがまだいる。俺が居なくても……グフツ……」

「ほざくな三流騎士が。アシュレイ？　どこのどいつだよ。そいつは……」

その時、山賊の頭に小石が当たり作戦が開始された。助けられた若者達が石を投げつけ罵声を浴びせているのだ。しかも、短気な山賊はリーダー格を欠いて居るためか見事に作戦にはまり6人中の4人が一応代理のリーダーの命令を無視してそちらに走りこみかなりアンナの攻撃を受けるような叫び声がきこえる。その後、イオーサのおかげで作戦が少し早まり片付くのも早かった。イオーサが何をしたかと言えば簡単に龍人族特有のブレスマジックという息吹攻撃を最大に威力を抑え残りの二人を凍結させたということだろう。ついでにリムの髪の毛まで固めてしまい少し問題も起きたが彼女の了承の許、山賊に握られていた部分を切り取り揃えて切ってしまった。

「おい！！　て、テメエ等！　冷てえ！　何なんだ……うおおお！　凍ってる！　凍ってる！」

「あ、兄貴！　何とかしてください！」

「む、無理を……い、いう……んじゃねえよ」

「兄貴……し……ぬ……」

「ナイスタイミングと言いたいがリムの髪の毛はどうするつもりだったんだ？　イオーサ」

「……焰で……」

「おい、それはないだろう」

「お気づかいありがとうございますアシュレイさん」

「なら、熱で手だけ溶かす」

「その必要はあません。一思いに斬り落としてください」

「いいのか？ 妹に髪は命の次に大切な物と聞いていたが」

「それは人それぞれです。私は仲間の方が大切です。暑苦しくて邪魔だったのでそろそろ切ろうと思っていたところだったので」

「そうか……なら、行くぞ」

「はい」

山賊の残党の籠城事件も村の若者とアンナの活躍もあり意外と早々、方が付いた。山賊の残党はすぐに他のメンバーが居る所に引き込みこの六人も村人に任せることにしアシュレイ一行は一日をこの村で過ごすことにしたようだ。村人の埋葬を手伝いそれから休みを取る。とはいいつつ体の疲労や怪我などの回復が他より異様に速いアシュレイは子供たちにすがられるままに槍術を見せている。彼、アシュレイはこれまでの人生でかなりの生存術を学んでいたようだ。火の簡単な起こし方から怪我をした時の簡易の対処法、他には退屈を紛らわす方法や存在感を零に見せる方法など……どうでもいいことから庶民でも身に付けた方がよい物まで数多く知っている。加えて毛色の様々な子供たちの中でもさらに目を引く白銀の髪と左右の黄金と銀の瞳に青白いままでの体色と背中の焼印など目を引く要因は多くそろっている。

「お兄ちゃんはどこから来たの？」

「俺はあの山の向こうから来た。出身もそこだ」

「山の向こうには何があるの？」

「……。まだ、皆には難しいものだな」

「背中にお絵かきしてあるけど落ちないの？」

「これは焼印と言った。一度付ければ取れない」

「お兄ちゃんだけ武器使ってないけどお兄ちゃんは何を使うの？」

「俺は槍を使う。今はないけどな」

「見せて！」

「いいだろう。そこの棒を貸してくれ」

彼の体技の元々の使い方としては槍や薙刀を振り回したり突きだすなどその他にも投げたり切りつけたりするのに合わせて彼が考え特化した武術らしい。見せる中でも彼は真剣だ。占拠された協会はここの流通協会の建物だったらしく倉庫にはまだたくさんの物資が残っていた。山賊ですら壊せない大型の金庫のある村などそうはない。ここの村には金融や嗜好品を扱う店も少なくないが昨晚の襲撃で多くの建物が被害を受けたそうでそう言った店ほど被害が大きく復興には時間がかかるだろう。しかし、行商人は相変わらず来るようにアシュレイや次に体調を回復させたイオーサが近づいて行く。何故か彼女も子供たちには人気でさっそく女の子たちの塊ができる。その頃シドはリムからの手当てを教会で受けていた。昨晚はたまたま手近な建物の流通協会の看板の内『協会』としか文字が残っていない建物を使ったが村の外れにある大きな西洋地方の作りをしている建物に居るのだ。そこは荒野ではあるが街のはずれに向かうに従って大地の地形になっている。ここの端には粘土層の地層があるため地下水をためることができそのため土地を利用して大きな農園地帯を作れているのだ。

「いだだだだだ！ 姫！ 止めてくれ！ 痛い、痛いから……」

「ダメよ。貴方にしてはよく頑張ったけど……こんなに酷い怪我をして」

「これくらいならすぐに……いだだだだだだだ！」

「だから無理しない！ アシュレイさんのように特別な体じゃないんだから」

彼らは槍術とアシュレイの知恵のお陰で村の中ではかなり有名になった。近くの茂みに隠れていた住民も少なくなかったようである。ここまで大きな被害は……あつたがとりあえず復興できなくなるまでの被害は抑えたと見える。続々と帰りつく住民たちをよそに彼らは旅出の準備を始めるのだ。荷物をそろえ全員が万端の状態でひっそりと村を出た。最終的に一番重傷だったシドもあたりさわりない程度に回復し再び長い旅路に就く。ここを出るとなかなか村にはたどりつけないとアシュレイが周りの4人に告げる。だが、彼らにとつての安心は落ちたり転んだりすると即死するような危険な場所が少なくなることだろう。武器もあらかた揃えてあるため荒野での戦闘にも慣れているメンバーが多いから順風満帆ともいえないが何とか乗り切れそうな構図になっていた。

「いきなりだがお前たちはこの大陸の形状は知ってるか？」

「え？ アタシは知らないよ」

「図式でなら見たことはあります。しかし、細部の形状までは」

「俺はあの土地から出たことはいないため知りませんね」

「同じくそうですね」

「なら、話そう。世界には『海』と呼ばれる大きな水たまりがある。その他には八つの巨大な大地の塊があるが正しくは九個だ。空中回廊が含まれればな。俺達が居るのはその中でも一番大きな大陸……エリユーゼルムだ。ただし、総面積を考えるとこれもそのうちの四分の一だからそう大きい訳ではないぞ。そして、界印は8つあり各大陸に一つ。加えて絶対に開いてはならない『輪』の改印が今は空中回廊にあるんだ。これから俺達が向かうのは光の界印『ヘブンスゲート』があるところで……俺達はそこに向かっているが……解るか？」

一同が理解できたようなのでアシュレイと共に再び速度を上げて歩き始める。昼の日照りは嘘のように夜は一気に冷える荒野。巨大

な荒野の横断はそういうリスクもある。だが、アシュレイは涼しい顔で歩いている。他の4人は熱さや強風、突然の砂嵐や巨大なモンスターなどで嫌気がさしているように見えた。そんな4人はアシュレイに疑問を投げかける。そんな荒野で見たところ涼しい顔をしているのはアシュレイだけだ。……というよりは何故涼しい顔ができるのか疑問だろう。

「な、なんでそんなに……。あんただけよ。アシュレイ、あたしにもその元気を分けてほしいわ」

「そんなことはないぞ。シドもよく耐えている」

「アシュレイさん……俺のは『やせ我慢』です」

「私も……ダメ」

「イオーサ！ でも、アシュレイさん。私たちではこれは少し厳しいです。あなたは慣れていても……」

「そうだな。少し休もう。だが、日陰なんてどこにもないぞ？」

「そ、そういえば……どうすれば」

「これくらい考える。ローブを枝やロッドを使って立てる少しはましになる。シドは鎧の一番上の外装をとれ。それが暑さの原因だ。

イオーサは……あんまり脱ぐな。その肌の白さだと日焼けでただれるぞ。他は……まあ、大丈夫だな」

「あと何日くらいでここを抜けられるんですか？ このペースでは皆、数日と持ちませんよ」

「だろうな。お前らが持つギリギリになったら俺が助ける。そうすれば何とかなるだろう」

「なんとかって……」

「なんとかだよ」

「……」

荒野を横断するにはそれなりの装備がいるが彼らは金銭面でも苦しいためか、あまりそういうところを無傷で超えられるほどの装備

であるとは言えない。アシュレイは皆の反応通り全く動じていないが気温が40度を超える猛暑の中では普通の人間と呼ばれるヒューマンは平常の体調では生きていけないのだろう。デミヒューマンのアンナはあんまり応えてないように見えるがその彼女でも段々と熱さの関係で衰弱が始まっている。そして、ヒューマンの二人よりも気温の差に弱いのは龍人族のイオーサだ。一番弱っていて一人では歩けずアシュレイが肩を貸している始末である。ここがどういう環境下にあるかと言えば……木であつても低い膝ほどの高さしかないものから葉が少なく楕円状に幹を作る木などこの場所に適応しようとして一生懸命になる程。環境の適応能力が人よりも高い植物ですらこういった場所では少ないのだ。そういう荒野を超えるにはそれなりの心構えが必要になるとアシュレイが休んでいる間に語っている。その少しの休憩の後にもた、今度はゆっくりとだが歩きだした。

「じきに夜になるか。あまり速く歩かなくても問題ないぞ。手近な岩場にもぐりこんだら恥じらいなんて捨ててくっついて寝るんだ。そうしないと命がもたない。俺はいいが特にお前たちは厳しい。シド、リムはイオーサを内側へ入れる。アンナには悪いが外側になっちまう」

「いいよ。それよりホントに冷えるんだね」

「ああ、寒暖の差が激しすぎるんだ。だから特徴的な生物しか生きていけない。人は比較的軟弱な生き物だ。その点、知能で生き抜いていくしかない。夜の見張りは俺がする。お前たちは寝るんだ。慣れない旅で相当疲れているはずだからな」

アシュレイの見張りで夜を過ごし朝を迎える一同。アシュレイは既に起床し火を焚いて干し肉をかじりながら残りの4人の起床を待っている。そのうちの一人が起き始めると次々に目を覚ます。気温差は最高気温40度から-10度……まだ夜明けが来たばかりで気温は-の域からあがりきらずかなり寒いのだ。それでもアシュレイ

は上半身裸で前の村で手に入れた槍を構え振り回す。その鈍い空気を切る音を聞きつけて最初に起床したシドはそれを見るなり父であるアトモスから受け継いだ剣、ドラゴンキラーをつかみ鎧を身に付けアシュレイに一礼する。

「あの時以来ですか。剣を構えるのは」

「ああ、槍術は初めてか？ 手加減するぞ」

「いえ、本気で来てください。あなたの実力が見てみたい。剣と拳では10と1の違いがある。俺もあなたの10の槍を見てみたいんですよ」

「まあ、8くらいになるだろうが許してくれ。この槍では8割以上の力を出せばこわれる」

「解りました」

10メートルの間合いを取りアシュレイは突きだす構えを取りシドも剣を構えを取る。シドの目つきが厳しくなり二人がものすごい速度で剣と槍をぶつける。騎士の剣技とアシュレイの槍術はタイプが違いすぎるためか全く攻撃が当たらない。二人の声が響きリムとアンナが目覚めます。金属のぶつかる音は普通心地よい音とは言えないその音で目覚めてしまったのだ。リムが干し肉をかじりながらシドとアシュレイを見ている。その直後にアンナが夜露をボトルに集める作業を彼らを見るリムが手伝う。

「あの二人。楽しそうね……、うんしょ」

「うん、心強いこと間違いないけど……ね、この作業……地味い」

「イオーサはまだ起きない？ そんなこと言わないでよ。水が欲しいなら集めましょ。一口でも」

「イオは龍人族だから体温の変化が激しすぎるんだって……」

「ううう……ん、朝？ ふ、二人とも……シドとアシュレイは？」

「「あそこ」」

「あ、あれ？」

大きな音をたててドラゴンキラーが弾き飛ばされアシュレイの槍はシドが叩き付けた最後の一撃で地面に刺さる。アシュレイがドラゴンキラーを拾い上げ槍を引き抜く動作を見せると残りの3人が近づいて来るのが見えた。シドの方は汗だくだがアシュレイの方は息が上がっている程度で全く疲れていない。リムの管理の許、干し肉を食べる。アシュレイが立ち上がり地面に耳を付けるといきなり足を使い何かを始めた。これも旅先で身に付けた知識なのだろうか……。4人が見守る。疑問が爆発したらしいイオーサが聞いてくる。荒野のと真ん中でそんなことをする人はなかないだろう。

「ア、アシュレイ……何をしているの？　そ、その変な行為は……」

「ああ、荒野で水源を探すときに使った。もつとも俺達くらいの張力と振動感知能力がないと無理だろうが。とりあえずこの下に水源があるんだ。とりあえず、少し離れてくれ」

「まさか……やる気？……」

「ああ、お前らが水がなくて死にそうだからな。そろそろ……」

アシュレイの渾身の力を見ることになる一同。血管が異様に浮いた腕を振り地面をに打ちつける。荒野の地面のと真ん中にクレータと亀裂が起こり間欠泉のように水が噴き出す。恐ろしい破壊力だ。武等派のシドは口を開けたまま止まらずリムは拍手をし、それを見ている。アンナはさして驚かない上にイオーサも同じような感じで動じない。だが、水を得た事は嬉しいようでアンナが真つ先に水に飛び込んだ。次に柄にもなくイオーサ、シドとリムが同時に飛び込むのを外側で胡坐をかいてアシュレイが見ている。

「楽しいか？　ガキども」

「……………私は同い年です」

「ガキは酷いですよ。アシュレイさん」

「アシュレイも飛び込めば皆ガキだあ！！！！」

「どうだろうな」

戯れはその辺にしろと厳しいアシュレイの言葉がかかり皆がブーたれる中、アシュレイ以外の全員が服を脱ぎ、下着姿の状態にいる。そのまま飛び込んだためこうなるのだ。その間にアシュレイが水筒とボトルに水を詰め自分のリュックに詰めていく。代わりに他の4人のリュックに細めのナイフ、包帯、消毒薬、戦闘用小刀、火薬、薪、金貨、銀貨、銅貨を分けた財布など彼のリュックに入っていた物をさりげなく移し4人の様子を確認している。荒野のど真ん中のため空を円形に飛んでいる鳥以外には生物と言える生物が見当たらない。下着姿のイオースァが小枝を見つけ列を作る蟻をつついて遊んでいる程度だろう。他は……。

「シド！ スケベ！ 変態！ こっち見ないでよ！」

「んなこと言っても……」

「こら！ 砂を飛ばすな……アンナ、責任は自分たちにあるんだぞ？ もう少し大人かと思っただが……。解った……お前らにいい物だ。服もそろそろ乾いた

だろうから着てこっちに集まれ。俺の体の秘密を教えてやる」

「秘密？」

「そうだ。俺はな『カオスゲート』の向こうの住民つまり『鬼』の力を持つてる。皆は鬼の事を勘違いしているがオーク・オーガ・ゴブリンなんかだけを鬼とは言わない。向こうの住人全てを総称してそう呼ぶんだ」

「それはどういう……」

「つまりだな……」

アシュレイの肩甲骨が盛り上がり羽がいきなり現れた。額から角、

爪が発達し体表には鱗のようなものが浮き出てアシュレイが変身していく……。ここが荒野だからできることだ。4人は口を開いたまま啞然としイオーサですら初めて見たという口ぶりだ。彼の説明からすれば『カオスゲート』の向こう側つまり地獄の向こうの『裁かれる魂』意外の住民は全てが鬼ということだ。さつきまで近くにいた鳥が姿を消し音がなくなったのを期にアシュレイが再び話始める。

「アンナも変身ができるはずだ。デミヒューマンの人間との違いは単に寿命や既知のみではない。俗に言う『呪われている』か『呪われていない』かだ。お前はおそらく森林族だろう。ウォルストラーさんが言っていたことと照らし合わせればそうなる。それからシド。お前は普通の人間とは少し違う。ヒューマンではあるがな」

「もう、何が何だか……」

「待つてください……。ヒューマンではないヒューマンって？」

「簡単にはあなたはそう成るべくして生まれたのよ」

「イオーサ……」

「そう、お前は『古人』（いにしえびと）だ。体の形状が少々違う。さっきので確信した。リムもシドも普通の人間ではない。リムも『古人』だが族が違う。君はエレメンズと呼ばれる魔法に特化した人種だろう。イオーサは言うまでも無く『ヒューマンドラゴン』だ。ちなみに雑学だが『ドラゴンヒューマン』との違いは龍に近い人か

……」

「人に近い龍か……私は人に近い龍」

「それからもう一つ。お前たちは『覇者』を目指したいか？」

「どういうことですか？」

「飛びながら話そう」

背中に乗り空高く舞い上がった。4人は快適な空の旅を楽しんでいるのだらう。アシュレイの龍の種類は『ヴァリトラ』と呼ばれる有翼の二足歩行龍だ。そのため背中も広く4人は2人1組で座れる

ほど広い。実際の事を言えばアシュレイの大きさがだいたい50メートルと少々ほどあるためなのだが……。低い雲にぶつかりシドが呻いたりバランス感覚が他より悪いリムがたまに座りなおしたりしては居るが晴れた空は彼らに好条件の旅を約束している。現代ではそんな体験はすることはあまりないだろうが小型のプロペラ機に乗っている感じた。

「あの、さっきの話は？」

「ん？ 簡単だ。答えから言えば覇者の中のリーダー格になる『霸王』は俺達アークオーガや特別な種族からしか生まれない七種の一族だ。いや、正確には八種か」

「古龍人の文献で見かけたことがあります。イフリート、ウォーテイ、ドリアード、ジン、アーシエ、フロゾス、アークオウガは太古の理を継ぎし者」

「そのものズバリだな。最後はイオーサの属すというか種類の『ヒューマンドラゴン』だ。それに付いてくるものたちを『覇者』って言っんだ」

「なら、迷わなくてもいいんじゃない？ アシュレイ」

「そうですね。俺達はもう旅を始めている訳ですし」

「そうですね。私もいささか自分に疑問が残りますが……面白そうですし。問題ないですよ」

「私もアシュレイと共に歴史に名を残す」

「決まりだな。次の街が見えたらしがみつけ！ 急降下するからな

！」

「了解！」

「絶対！ 絶対言つてよ？」

「解っている」

「……」

「イオーサは絶叫系ダメ？」

「……むしろ好き」

快適な空の旅もつかの間だ。陸路を行くとかなりかかるがアシュレイが空を飛ばば山を二つ越すのも数時間で済んでしまう。アシュレイ本人が『言霊の樹街』で最初に言っていた『歩旅』と大きく違うが次に向かう街が見え始めた。風邪を切りアシュレイから『掴まれ』というサインが上がりシド以外の3人は目をつむり急降下に備えるが遅れたシドはタイミングが遅れ大きな叫び声をあげる。死ぬほどの声を上げて失神したシドを小型化していたアシュレイがキャッチした。

「全く……アシュレイ。急降下するのはいいが45度以上の降下角度では皆体が持たないぞ」

「そ、そうよ。もう少し手加減が欲しいわ」

「……シ、シドは？」

「落ちてくる。そろそろ……ほっと」

「う、うわ……完璧に伸びちゃってる」

「そうだな。ここで一休みしたら街に入ろう。どうやらここはかなり大きな城塞都市らしいな。誰だ！」

アシュレイが槍を構えると驚いていたのは逆に相手だった。背中には大きな鞆を背負っている。何やら重そうな雰囲気があるため女の子だったことからアシュレイは攻撃を止め武器を収めてから尻もちをついている女の子を立たせた。彼女の案内で街まで入ることになる。シドと荷物を担いだアシュレイと前を歩いている女の子の後ろを三人が付いて行く。ここはアグレイアに近くはなったがまだ倍以上の距離があるエリアだ。鉱産資源の豊かな場所だと言うことは確かでここにはチナという民族が多く住みその中でも多くの部族が風習の差か何かは解らないが壁を作り自治区を組んでいるように見えた。アシュレイの見立てに驚く少女に案内され奥に進んでいく。すると……。

「ひ！ こ、殺さないで！」

「……すまない。旅の者でな少し神経をとがらせ過ぎた」

「え、あ、うん。あの……その槍って使い込んでます？」

「いや？ 俺の力が強すぎるだけだ」

「凄い……こんなになるなんて……来て一緒にください」

「解った。君はチナ族の口エ族の子だね？」

「わ、解るんですか？」

「何となくな？」

「家に来てください！ ここであったのも何かの縁でしょ！ それにあなたもしかして？」

「ありがとう……」

街は石で舗装され壁も多く衛生的とは言えたものではないがたくさんの子供と働く女性が見える。旅の者が通るのは珍しいらしく特にアシュレイはよく目を引く。次はシド。この地方は『和』と呼ばれる風習が強く鎧や武器の形状が違うのだ。彼の全てが金属製の大鎧を目にするのが珍しいらしい。兎にも角にも旅人が珍しいようだ……。子供たちが話しかけてはこないが近寄ってくる。ひそひそと主婦たちの話声が聞こえてきていた。アシュレイ以外のメンバーが周りをきよるきよる見回す。外界は珍しいらしいのだ。

「俺が知っていることか？ ……チナ族には口エ、ニゲイア、ソルベを中心に武等派の部族も多い。ブドウ、ズーロ、ガンロなどが有力と聞く。君は穏健派で二番目の数を誇る口エ族だろうからこの奥か」

「凄いですね。来たことがあるのですか？」

「あるよ。そういえば君の名前は？」

「ウルです。口エの銀狼とは私の事なんですよ」

「口エの銀狼……そうか、お爺さんもそう呼ばれていなかったかい

「？」

「え？　なんで知ってるんですか？」

「俺は君と会ったことがあるな。かなり幼いころだが……」

ウルのご案内で彼女の家らしきところに付くと中に荷物を下ろしシドが目覚めた。その次は奥に居た祖父らしい男性が現れたかなりの年齢だがまだしっかりとした目と腕筋と長身というか……200センチを超える巨漢で片手に大槌を握っている。アシュレイが一礼すると後ろの全員がそれに合わせるように……ウルまで一礼した。いきなりアシュレイの頭を鷲掴みにし撫でくり回すサラサラの髪の毛が空気を帯びてふさふさになっている。そういえば彼女、ウルやその祖父も含まれるチナ族は多種混合族で獣人などが多い。他にいろいろな特徴を持つ種族がいるが……アシュレイのような美しい容姿の近人種はいないと彼女が言っていた。

「おう！　坊主！　久しぶりだな。親父は元気か？」

「おそらく健在ですよ」

「おうおう、その感じだとお前はまた故郷にも帰らず旅をしているみたいだな」

「はは、今はその故郷に向かっています」

「色とりどりの仲間だな。おや、龍人族、古人、いにしえびと偽人族……ほう、

なかなか面白いメンバー。気に入ったぞ。旅をしているということとは『覇業の旅』でも始めたのか？　親父のように」

一同が大きく声を上げ口を開いて驚く。そう、彼の父親は先代の覇者だということになる。そして年齢も驚く要因だ。本来のアークオーガの年齢をいかに飛びぬけているかということ彼の父は彼が知っている年齢では御年458歳のかんりの高齢だという。そして、母親もそれに近いと言っていた。アシュレイの一族にまわりが興味を持つのも解る。写真などはないかと聞かれたが全くないらしい。

「しかし、不思議な一族だ。もう500近いだろう奴は」

「いえ、今年で458歳です」

「ねえ、それ誰の年？」

「俺の父親の年だ。言っのが遅れたが俺の親父は一応『霸王』で名はレンサースだ」

「へ？」

「あの太平共和時代に居た少年勇者の？」

「うええええええ！？」 『霸王』の息子！？ それに458歳って超お爺さんだよー！」

「ああ、そうだ。だが、見た目は若いぞ」

鍛冶屋の老人の勧めで外を歩く。すると広場で宣伝する物を物欲しそうに見ているウルに気がついたアンナが問いかけている。素直なウルはそれが何についてかを話してくれた。見た目は大人びて可愛いウルだが年齢はまだ12歳でそれに関われる年齢ではないそうだ。それを何か聞いた時は一同が驚きそれを見上げる蒼白い光沢のある金属塊はだいたい平均身長のヒューマンの男性がうずくまったぐらいの大きさがある。それは『霸王石』……別名『オリハルコン』と呼ばれるどんな金属よりも固く加工がし難い。だが、鍛冶師なら誰でも憧れを抱き、一度はその腕を試すために鎚で打ちたいと願う物らしいのだ。ウルはどうしてもそれを祖父に打たせたいらしい。最近は年齢を感じたのか鎚を振るうことが減り元気がないと言っのだから断りきれなくなってしまった。標的はアシュレイだ。参加費用もかかるためかウルは直接的に出てほしいとは言わなかったがアシュレイは珍しく笑顔を作り出場を決めた。全員の手持ちの金を合わせてギリギリ出場料金で年齢もアシュレイとリムはクリアした。アシュレイだけが出場するためカリムは気楽そうだが……。

「あたしはお爺にまた力強く鎚を握って欲しいの……最近しょぼく

れちゃって元気ないし」

「……」

「あれさえあればお爺も元気になるかなあとは思ってたんだけど……あたしまだ１２歳だし１７歳からしか出れないんだこの大会」

「アシュレイさん……何とか出来ませんか？ 俺からも頼みます」

「優勝賞金とかはあるのか？」

「あるよ。確か４０００マナだったと思う」

「かなり高額ね」

「出場料金は？」

「１００グリン」

「ギリギリかな？ ……あとはアシュレイ次第ね」

「俺も興味がある。あの人の作る武器にな。あれだけ大きなオリハルコンなら良い武器を作ってくれるだろうしな」

「じゃあ！！」

「やろうじゃないか。あの大会。武道大会だったよな？」

「はい。この街以外からも有力な戦士が軒を連ねてるらしくて……」

「久々に槍が使えるそうだな」

「ランサーなんですか？」

アシュレイの槍は今日中に祖父が鍛え直すといっていたウルはアシュレイの手伝いになればと金稼ぎの方法を教えてくれた。もとよりアシュレイはそれをするつもりだったのだから道具を揃える資金がないためできないと見ていたらしいが……。ウルが石畳の街道を遡り楽器屋の前で止まった。彼女はそういう土地に生まれたからかなり商売に慣れている。その点ではアシュレイより彼女が秀でているのは言うまでもない。楽器屋の前で止まり横笛を扱えるアシュレイと弦楽しかできないシドとリム、縦笛しか使えないイオーサをその場に残しアンナの右腕を引っ張って彼女の家……いや、工房に飛び込み奥で何やらしているようだ。

「ねえ、おじさん！ 楽器の宣伝させてよ」

「あ？ ん？」

「どう？ このお兄さんかつこいいでしょう？ この人なら噂を聞きつけた宿場町のお姉さんたちも来るんじゃない？」

「ふむ。あんた、どこかで会わなかったか？」

「お久しぶりです。ヤッカルさん。アシュレイ・オウガ・モノライナーですよ」

「坊主はあの時の！！ えらくデカくなったから気づかなんだな。

まあ、いい。美人のねえちゃん達もいるから下に降りても商売になるだろうな。……ってウル？ あのお転婆どこ行った？」

「おーじーさあーん！！」

「どう？ アシュレイ……」

「アンナなのか？」

「綺麗……」

「先手必勝……だけど、抜け駆け禁止。この衣装なら私が炎舞を合わせる」

「ねえちゃん魔法使いかい。ウル、魔法具屋の野郎に情報売りに行きな。アイツならたんまり金を出すだろうよ」

「りよっつかあーい！！」

商売上手な街の売り手達は下の街という主に旅客を目当てにしていた産業の街に降りていく。キラキラ輝く衣装を身につけた踊り子や遊女、遊び人、武人、高官など身分も様々でいろいろ居る。彼らもその中に混じり商売を始めることになった。上の街は寂れているがこの街は活気ばかりがよく空回りしているように見えるようだ。アシュレイはこういう空気が好きではないと見える。民族衣装の仮面と服を着ると横笛に力強い息を吹き込み音を奏でる。いきなりなこと皆がこちらに目を向いた。そこにかなりアクロバティックなダンスを披露したのがアンナだ。天性の柔らかさと身体能力は恐ろしくも美しい。周りの客がそれに惹かれると同時にシドとリムの出

番になる。弦楽を始めるのだ。いきなりは続きアシュレイが武器屋から借り受けた模造刀でアンナと武舞を見せる。アシュレイも見た目や動きは美しい。

「始めましょうか。皆さん集まりましたか」

「おう、みんな向こうの客寄せに負けてあんまり収入がないもんでな。客さえ集まればあとは何とかしてやろうや」

新しい見た目らしく慣れないがヴァイオリンのような弦楽器を扱うリムと大柄な体格を生かして大きな置き型の弦楽器をかき鳴らすシド。曲は雰囲気作りのアドリブであるからたまにズれるがそこはアシュレイやアンナのフォローでかわす。そこにめんどくさいことが起きた。武舞を見た武人がアシュレイに勝負を挑んで来たのだ。明らかに豪傑というような大柄な体躯に蓄えた長い髭と険しい目つき。武器屋がここぞと薙刀を投げ渡してきた。

「天晴れなり！！ その若き者よ。ワシと一戦交えんか？」

「……わたくしは良いでしょう。しかし、ここでは皆様に迷惑ではないか？」

迷惑などではなく宿の二階からも沢山の人が見物する程だ。それを商売にするのは彼らの後ろに居る商売人達だった。すぐにかなり安い金で席の売買を始めかなりの収益をあげたようだ。投げ渡された薙刀はしっかりした作りらしく一応の手応えを感じたアシュレイ……。半径10メートルの円ができ手合わせが始まった。アシュレイも力は出しているが全力は出さずに武人の戦い方を探ろうとしている。武人は楽しいらしく持っていた槍を振り回し突き出し攻撃してくる。だが、勝負は意外に早くついた。いきなりアシュレイが目にも止まらぬ速さの攻撃を繰り出し相手の裏側に回って武人が振り向くのを期に薙刀を小回りをつけて振り、振り向いた武人が尻餅を

ついてその鼻先に薙刀の刃をかざし後ろに三步下がり一礼した。武人もこれほどの戦いはなかなかできないと礼をいいお互い清々しいまでに握手をしてその場は片付いた。その後、アシュレイ達と商売人一行は上の街に戻り山分けを始める。

「いやあ、おねえちゃんの魔術には惚れ込んだよ。あんた龍人族だろう？　こんなに別嬪なお嬢さんが旅をねえ」

「イオーサは何をしてたの？」

「簡単には……子供達に安全な魔法を教えてた。火傷しない小さな丸火とから水玉でお手玉とか……石ころで駒を作るとか」

「地味に頑張ってたのね……」

「お陰でうちは大盛況さ」

「俺んとも良かったぜ。楽器も大分売れたしな。久々に酒を飲めるぜ」

「アンタらはあと何日残るんだい？」

「武道大会に出場し賞金を手に入れるまでですね」

「なら、あと二日は大丈夫だな。これから頼むぜ。今日の稼ぎだ。山分けで等分だから安心しな。俺達もそんなにケチケチしてねえからよ」

とかなりの額の金が入った包みを渡され逆に目を疑う一同。女性陣3人は沢山持つていれば襲われる可能性も低くはないためかアシュレイに沢山持つことを禁止された。まだ、昼間で外に出ていても大丈夫な時間帯だがアシュレイの判断も間違っではない。人の世にはそれぞれ心を持った人間がいて荒んだり疲れた者も居るだろう。それを警戒しているのだ。髪を撫でつけるいつもの仕草をしながら開場に入り初戦の男と対峙した。相手は格闘家らしく武器は無い。アシュレイが地面に槍を突き立て彼も拳を構える。

「なかなか、いいフォームじゃねえか。その構えは……確か楼拳だ

な」

「よくわかりますね。では、行かせてもらいます」

格闘家の男も驚いただろう。いきなり相手の拳が顔面に現れたのだから……審判の笛はアシュレイが動きを止め格闘家が言葉を発する直前まで吹かれず誰もが目を疑った。まだ17歳の……大会最年少の少年がいきなり常連参加の男を負かしたからだ。しかも、開始から数秒しか経っておらず開場も凍りついた程の出来事である。驚きは大きな城塞都市全体に広がった。そして、二回戦は不戦勝に終わることになる。下の街にいた武人だったのだ。

「そつえばお前さんの名は？ 白銀の勇少よ」

「アシュレイといいます。アシュレイ・オーガ・モノライナー」

「ほう、珍しい名だな。よかるう。ワシはショウ・エンラクだ。よろしく頼むぞ」

1日が拍子抜けするほど速いと5人が言う。アシュレイは残り一人で優勝というところまで勝ち上がっていたのだ。それに加え、どの武道家との試合もだんだんと時間は長くなりつつあるものの結果的にはかなりアシュレイの圧勝が色濃い運びになっていた。アシュレイ本人が残念そうだが最終戦になる。これも圧勝しとまではさすがにいかなかった。久々に槍を使い足を踏み込んでの戦いになり正直楽しそうに見えるほどだ。結果的にはアシュレイの勝ちに終わり男が握手を求めて来る。

「君は……アークオウガだね。名前は？ ……おつと失礼。俺の名前はローエン・ハルバート・ライグネスという。元騎士のしがない賞金稼ぎだ。君の槍術はどこでも見ることができるものではないからね。以後、よろしく」

「アシュレイです。以後、お見知り置きを」

「ローエン！！ 2位でも賞金はバッチリだ。行くぞ！」

「待ってくれ！！」

「仕方ない奴らだ。あの羽のある男は君に三回戦で負かされてイライラしてるんだよ。また、どこかで会おうな。アシュレイ君、ちなみに羽のあるあれはアルゴ・バーンズで私はギ・エンロウという。またどこかで会おう」

ウル祖父のもとにオリハルコンを持ち込むといきなりそれを凝視してから奥の鍛冶場に消えた。カンカンと金属を叩く音が聞こえるなかアシュレイが夜空を見上げている。彼は夜空が好きらしい。指を空に合わせ正座をかたどって行く彼を見ている者がいた。既にアシュレイは気づいていてそれを指摘することなく星に目を止めている。その後、その見ていた人間が梯子を上ってアシュレイの居る屋根の上に登って来ていた。この地方のピッチリ来る長そで長ズボンに着替えており、わりに大きな瞳を星に向けて小さな声で呟く。

「助けてくれて……ありがとう」

「ん？」

「どうしてあなたはそんなに強いのか？」

「そういう訓練をしたからな」

「……そうじゃなくて、なんであんなに簡単に人を命がけで助けに行けるのか？」

「俺は自分の命が惜しいとは思わない。それよりも失って困る者の命を助けられるなら自らの命を投げうつ方が自然じゃないか？ 少なくとも俺は父にそうやって教えられて来たんだ。母さんも同じ考えの強い人でな……彼女の影響の方が俺には強い」

「……私は、居場所がなかったのだ。私が物心付いたころには父も母もおらず私は一人。これまでシドが来るまでは私は孤独そのもの……グングニル家とて私の力欲しさの縁組だ……アシュレイ？」

「下の街の様子が変だ。おかしい……火の手？ 様子を見てくる。」

お前は残りのメンバーに荷物をまとめるように言っただけだ。今ならまだ余裕があるはずだ」

アシュレイが屋根の上を走って行くのを見た後イオーサも荷物をまとめリムに経緯を話した後彼女も街に走っていった。アシュレイが到着した時には昼間に会った戦士たちが重武装している兵と多勢に無勢ながらも奮闘しているのを目にしたのだ。アシュレイが手近に居た敵の兵の腕をつかみ勢いを付けて一気に話した。敵兵は増援だった一個中隊に激突し少しの間だけ会話をする時間ができたようにアシュレイとローエンの一行と遭遇したことをいい機会に生き残った戦士を集めこの城塞都市を利用して一度、精鋭だけを残して周りの住民を引かせていくアシュレイとローエンの言う元騎士の面々とエンラクが残り別々に奥の上の町に向かう。

「エンラクさん！」

「アシュレイ殿か！　よかった！　敵は何なのだ？　そなたは解るか？」

「いや、解らない」

「俺らには心当たりがあるぜ。アシュレイだったな？　奴らは中央政局を牛耳るヒューゼンという男が直属で率いている黒蠍クマノムシというネーミングの悪い騎士団だ。こいつらは残虐非道な連中しか集まっていないからな。強奪なんかもし通った後には屍と廃墟しか残らないらしい」

「惨いですね」

「そんな物ならよい。来るぞ。投石機の岩だ……いくらワシらでもあれは」

「行きます……」

アシュレイが飛び上がり片腕だけを高質化させ空中で岩を見事に砕く。ローエンの拍手が終わるとともにアシュレイが着地し次の案

件を他に告げる。その頃のウル宅では……。シドやリム、アンナが大騒ぎしていた。アシュレイが言い残したのはまだ何が起っているのか解っていないということだ。その内に彼が数人の戦士を連れにくることで何が起っているか把握したシドも動こうとする。しかし、アシュレイの告げた言葉はその意向に沿わず……。いや、正反對でシドにはほかの警護をさせ先に街に居た住民たちを守らせるために。

「アシュレイったらなんで核心を隠すようなことをするのよ!」

「アンナ、仕方ないわよ。彼も考えがあるはずだからもう少し……」

「そんなこと言っただって!!」

「どうした?」

「お爺さん! アシュレイが下町の様子が変わって言うてからまだ帰ってこないの」

「ふぬ……、まだ坊主には遊女遊びは早いが……」

「ガンテツさん。俺は遊んでなど居ません。下町が軍に占拠されました。住民の多くは上の街に上がり避難しましたが攻撃は時間の問題でしょう」

「ならいきましよう!」

「それで? お前さんはどうしたいんだ?」

「俺達はアグレイアに逃げるのみですが皆さんが心配ですこの後は?」

「我々は裏山を回って奴らの攻撃が幕引きを迎えたときにこの都市に戻ろうと思っておる。それより、お前さんできたぞ武器だ。受け取れ…… お前ならうまくやれるだろう」

オリハルコン製の巨大な薙刀を受け取るとアシュレイには珍しく目を輝かせる。その後、作戦に関しては岩鉄と呼ばれた巨漢の鍛冶師とその孫のウルは住民を裏山の洞窟に入っていく。岩鉄は出がけにシドに奇妙な形の剣を手渡していった。だが、そこに残ろうとし

たのはアシュレイだけだ。大きな瓦礫が崩れる音が始まり投石が始まった事が解ったためアシュレイは外にでる。残りの4人は啞然としたが大縄跳びのように飛び上がりアシュレイの回した巨大な薙刀をかわす。ローエンやエンラクも先に行かせ彼一人がここに残ると言っていた。

「俺が一人が残る。俺が一人の方が被害は味方にいくいくからな」
「ふぬ、先ほどの一撃で8人か……そなたは何者なのだ？」

「ゲイザー。お前は感じるか？ あのアシュレイから覇者の……いや、霸王の素質を」

「俺に聞くな。アイツはまだガキだが……影がある。それを克服しなければならぬだろう」

「そうか……アイツなら……俺はこの世界を任せられ気がする。とても年下には見えないな」

指示通りにアシュレイ以外は残ったかのように見えた。シドがアシュレイに敬礼し剣を腰に差し替えガンテツが改造を加えたシドの鎧はこの地域性も含んでいた。新しい部位のガードパーツも増えているようだ。しかし、一人だけその場に残りアシュレイの横に並んだ少女がいる。イオーサだ。本当は防護用の長いローブを着ている彼女だが今回は派手だ。長袖に膝上10センチくらいのスカートで太ももに2つの円筒形の物を付けていた。

「イオーサ……俺の言葉は通らなかったのか？」

「私は愛を知りません。ですから、加減を知りません。あなたを私は愛してしまいました。これまで無償で私は愛という物を得たことのない私にあなたは……だから、私はあなたを守ります。私がアークオウガのことを知らないとしても？」

「どうしたいんだ？」

「私の身が滅びようと……あなたを護ります。私の意志です」

アシュレイが薙刀を構え敵に突っ込むのに合わせるようにイオーサが円筒形の物を開き空中で交差させ手にある魔法陣のような龍紋を共鳴させる魔法を使いそれを操る。強大な力がぶつかり敵が次々に死んでいく。アシュレイが急にイオーサをかばう……。アシュレイの右手には短めの矢が突き刺さり貫いていた。それはイオーサには届かず完全に抜けてもいない。多く撃ち込まれる巨石は彼の放つ異様なオーラではじき返される。語りながらイオーサはその目を直視できないらしく少しうつむいている。次の瞬間……イオーサは意識を失った……。

「俺に……先を見せたいならお前は生きるんだ。お前らが欠ければ俺も死ぬだろう。それが嫌ならお前は何としても生き残れ……お前がそういう生の元に生まれたのならな」

到達……『美しき靈峰は遙かなる魂の指標なりて』

我、語ろう。

時として主に逆らうも主を救う力となろう。

剣を駆り命絶つのみが闘いにあらず。

剣とは命絶つものと違いなし、されど我の思う剣の力とは心にある。

すなわち我、語りし剣とは護る物。

姿例えるなば我が剣とは我の心中に煌々と燃えし火と同じ……。

誓いし騎士の愛しきにまた主に捧ぐ心の形と表すのであらば我は強き焰を灯し主の躰かぬよう道を照らし導きを努め進み歩もう。

主、我を救わんと剣を振るう時……我、進んで力を解き我が愛しき主を護らん。

たとえ、我が心身が散ろうとも主の先に生をみいるなら我は本望なり。

心に据えし重き意志を携えて剣となりて振るうこと我がこの上なき喜びと言えよう。

我が主、我に告ぐ。

我が身滅ぶ時こそ御身滅ぶ時なると。

我が信念とは心の剣を主に捧げ護らんとすること。

主に従わず己を貫くこと……全て我が愛する人を想いてなす覇業。後……我、愛され覇となる。

我が心を継ぐ者よ見定めるのだ。

己の覇を貫くならば主を掴み離す事なく永久の愛を育め。

愛し攻める覇者……シルヴィア・ノア・モノライナー

焰が音を立てて燃える街の中でアシュレイの瞳を見るイオーサの姿があった。掌に矢が刺さったアシュレイが振り向き様に睨みつけ

た先に居た弓兵は尻餅をついてまるで恐ろしい怪物をみたように甲高い悲鳴を上げて一目散に走り逃げいく。掌から矢を引き抜くとダ―ツの要領で投げ、矢を空に放つ。その矢はまっすぐに逃げ出した弓兵の横に居た弓兵の眉間を射止め頭蓋骨さら貫いて貫通し鏃が後頭部から覗いていた。そのアシュレイはイオーサに何かを口ずさむと強力な結界を張って彼女がそちらに入れないようにしてから薙刀をつかむと敵の陣がある下の街に飛び込んだ。上から武器を構えて人が隊の真ん中に落ちてきたのだ敵の第一攻撃陣は驚いたであろう……。その後は悲鳴や奇声を上げる前にそこに居た全ての兵士が彼の振ったの爆風で吹き飛ばされて広場はそこを中心に一時的だったがガランとしている。敵の飛ばされずに残った兵士の目の前には軽装の鎧に身を包む『鬼』が居たのだ。恐ろしい形相のその容姿を見ただけで皆がすくむ。その姿とはこの世界では異質な生物を模しているのだ。アシュレイはどうやら感情が高ぶると何かしら体に変化が出るらしい。彼は以前に彼が述べているように『カオスゲート』の向こうの住人のあらゆる姿に変身できるのだ。今、彼が変身しているのは前回のように龍ではなく小さめの角が突きだし肌は蒼白で肩からも高質化した肌が出ているという姿で掌やかすり傷などの怪我も瞬時に回復し白い煙を立て痕すらなくなっている。彼はイオーサのことも気にしており逐一そちらに視線を移している彼がイオーサに何を言ったのかは知らないがそれが関係していることは確か……。それに彼が懸念していたのは彼自身の力で彼女を傷つけないこと……彼の力は制御しきれている訳ではないからだ。

「イオーサ……ここから先は修羅の庭だ。俺の牙が向く前にシドのところに戻るんだ。お前をあそこに居させなければならぬ理由もある……わかつてくれ」

「それはできない。……私は……そばに居たい。どうあつても……モノライナーと言うことはさっきの言葉はあなたのお父様かお母様のはず」

「ああ、我が母であるシルヴィアのことだ。そういう性なのかもしれないな。彼女も大きな勘違いをしていたようだ……お前も相当だ。よくよく考えてくれ。俺はお前を傷つけない……。今は来ないでくれ怪異の壁よ。我が親しき友の身を守れ……ウォール！」

新たに現れた弓兵団はアシュレイに近距離へ詰められほとんどが致死に至らない打撃が薙刀の爆風で吹き飛ばされている。それ以外の状態としては男性にしては細いが筋肉の浮いた腕の一撃で燃えてかなり脆くなっていた下の町はほぼ壊滅に至っていた。彼が移動するときに作る地面にできた巨大なボール状の穴……、薙刀で本当に薙ぎ倒されて倒壊した旅館や他の大型な商店、街道の敷石は彼が高くジャンプするたびに砕けたりはがれるなとして赤い土が見えている。イオーサはプレス魔法を使ってアシュレイの張った結界を破壊し彼の居る側に行こうとしているように見えた。だが、彼女の強力な破壊力を持つ龍族が使う魔法ですら全く刃が立たず激しい炎で中心部に穴が空く程度。傷はつけられるがすぐに再構築してしまい破壊には至らないのだ。

「アシュレイ……一人で背負いこまないで……」

下町から裏山の方面に向かった避難部隊に目を向けよう。敵の指揮官も人望や手腕的な面ではなかなかの人物らしくアシュレイの怒涛の攻撃をストレートに押して進むだけでは自軍に大きな被害が出てしまうこと……最悪、一人に四つの師団をつぶされてしまうであろうことを読んで作戦を変更し、ここを引きつけ役として進ませる前衛隊と側面に展開させて大きな街をぐるりと迂回させた状態の二つの別働隊を動かして囲み挟み撃ちにしようとしていたようだ。アシュレイはそれをさらに先読みしてイオーサに後衛をしてほしかったのだろう。……が彼女はアシュレイしか見ていないように猛然と結界を破壊しようと彼女が一番得意な巨大な炎の円柱を空中に描い

た魔法陣から放つ『ブレス』魔法を使って進もうとしていた。裏山にはアシュレイと年かさな彼らローエン騎士団が話し合い結果、ローエン率いる元白騎士隊とエンラクなど猛者も多く別働隊を食い止めるために動いた。しかし、かなりの頭数で攻め込まれればいくら歴戦の猛者ぞろいでも多勢に無勢は解りきった結果だ。そのため、イオーサにはそちらについて欲しかったということである。

「イオーサのやつ……どこ行っただ……」

「たぶんアシュレイと一緒によ！早くしないと追いつかれるわ！」

「うぬ、よくぞ二人で戦おうなどと思うな。さすがは紅の皇女の息子だ。意識が違う」

「シルヴィア様を知っているのか？まさか……あのアシュレイが？」

「それ以外に何が？あの坊主は簡単には死にはしない。だが、問題なのはあの龍人族の女の子の方だ。ここだ……そろそろ分岐するぞ」

「ね、ねえ。貴方のお爺さんって何者なの？ウルちゃん」

「私も解らないの。お爺ちゃんは私を引き取ってくれたけどその辺りは全く……」

「来たぞ！リム様とアンナは皆を連れて先へ！アシュレイさんの指示でローエンさんと他の方々が向こう側の防備を固めているはずだ。俺はここで食いとめます」

「なら、ワシも残ろう。ウルはお嬢さんたちを守るんだ」

「はいー！」

シドはガンテツと共にその場に残る事になった。鍛冶屋だからなのだろうかガンテツは妙にドラゴンキラーとイージスの盾の事にくわしかった。シドは新たに貰った大ぶりの片刃の太刀を背負っている。二人は近接武器で相手はボウガンと呼ばれる銃のように扱う弓矢で彼らを狙う。それらから放たれた矢が次々に二人を狙い放たれ

た。それをシドはイージスの盾ではじき返しその後ろのガンテツは鍛冶の時に使っていた物とは違う大ぶりの鎚を振り矢を落とす。シドはアシュレイとの旅で少なからず得た物があるらしく身構えが旅出前とは格段に違っていた。力強く足を前に出し速度を上げて敵陣に突っ込みドラゴンキラーを使って三人を鮮やかに切り殺していく。それを頷くようにガンテツが見ていたがその彼もタイミングを見計らって大きな足音を立てながら猛進し大きな鎚を一振りすると幾十人も人間を跳ね飛ばした。二人の攻撃がかみ合いガンテツは今度は嬉しそうに笑う。イージスの盾で攻撃をはじき返しつつ間合いを取って前進するシドと中後を兼ね備えた大振りの攻撃の核となるガンテツ。彼らはもう意識が通いあっているようだ。

「行くぞ！」

「来たぞ！ 小さい方だ！ 弓隊構え！ 引きつけて……うわっ！」

「隊長！ グアッ！」

「注意しろ！ 子供とはいえ強いぞ！」

「ここから先には生かせない！」

「ワシも忘れるな！ この小童どもが！！」

再びアシュレイに視点に移そう。アシュレイは真つ黒い大鎧を着た女騎士と攻防を繰り返していた。それまでに敵の本隊らしい剣兵隊と槍兵隊、重装兵団の三隊は完璧に壊滅しその辺りには見当たらない。それでも目立って死人は多くなく敵の本営から現れたその女騎士は賞賛なのであろう拍手をしながら現れたのだ。腰に提げた武器は細身だが独特な波紋の片手剣で大鎧は重装とは言いつつも体のラインに合わせてクッションの役割をする空間があり速度を上げた機動攻撃を重視した作りになっている。彼女は片手剣を抜き、一瞬で彼の目の前に詰め寄ってアシュレイが余裕といったいつもの表情で薙刀を使い受け止めて佇んでいた。威力は人智を超えていたらしくぶつかった場所を中心に空気が揺れ爆風を起こし建物の壁らしき

瓦礫が舞い上がるなかに二人の人影が現れたようだ。アシュレイに仕掛けた黒騎士と同じく片手剣を手にした二人目の男性らしい黒い鎧の騎士がおどと現れそこについて結界を破ったイオーサが背中から赤い炎の翼をはやして飛び込み、その彼女から奇襲さながらの攻撃を受けた男の騎士は後方に後退していく。

「できる……私、あなたが欲しい」

「お前は？ 見たところ同族らしいな。黒い鎧の女騎士」

「私は呪われし血の一族の末裔……黒蠍の第三騎士長。エルシア・オーガ・ウォーブルよ。あなたは？」

「アシュレイ・オーガ・モノライナー。覇者の旅を綴る者。そして、炎美の女武将と紫麗の覇者の息子だ」

「ね……姉さん。待ってよ……。うわっ！ な、何だ！？」

「アシュレイには……近寄らせない」

「くそう、姉さん！」

「大丈夫よ。フフフ。私は死にはしない」

「言っておくが俺も殺す気はない。無駄に命を絶つ気はないのでな」

二人の攻防が始まった。二人のスピードが目の捉えられる範囲を逸脱し始めイオーサと男の騎士が後ろに引いて行く。互いに武器がぶつかるたびに後ろに飛び退きまた、地面を人間離れした脚力で碎き突進する。そんな状態では足手纏いと感じた二人、特に臆病なのか早々と引き際を判断したのか男の騎士が救護に迎えるだけの距離のうちに最外殻に引いていた。背中から出ている炎でできた翼を使ってイオーサは遠くも近くも無いところの上空に居るようだ。闘いは沈静化などという観点を見いだせないのか更に激しくなり、また相手の女騎士は激しさを増すにつれ気味の悪い頬笑みを浮かべるようになった。アシュレイに傷をつけようとアシュレイのそれより自傷度の高い体術を使ってくる。わざと自分の関節を外したり地面に手をつけて体を回し脚全体を使った蹴り、一度空中で剣を離してか

ら返し手で剣を握りアシュレイに向けるなどのアクロバティックな技を多々使用していたようだ。対するアシュレイは薙刀の刃が当たりそうになると寸前で止めて切り付けないようにするなど相手に気遣いが見えたがそれでもアンナとの手合わせやシドの時とは違い拳には一発一発の重さという観点から見ても全く違う。アシュレイのようにして闘う者はあまりいないだろう……ここは戦場で闘技場ではない。礼儀などで闘う者などそれこそ皆無だ。彼女も……その微妙にできる空白のタイミングを狙って剣を振りぬく。彼女の切っ先がアシュレイの鼻先をかすめたがダメージが当たっているようには見えない。

「……なんで、あなたは攻撃してこないの？ 無駄な情は命を落とすきっかけでしかないと言うのに」

「無駄な殺生はしない。敵とて同じことだ。これ以上無駄に内輪もめをする気はない。弟と共に帰還しろ」

「そんなことはできない。私は……あなたを連れ帰る！ そして、我が夫として生涯を共にする」

「そうか、無理な相談だな」

「力づくでも……連れ帰る」

一言呟くとエルシアが剣を一度地面に刺し姿を変えていく。それを見たアシュレイもそれに呼応するように体に力を込め始めた。後ろに居た男の黒騎士がそれを止めようとしていたが彼女は変身を止めようとはせずイオーサが驚くなか彼女の本当の姿が解って来たようだ。二人の動きは山頂付近に到達していたリム、アンナ、ウルと他の住民たちに加え反対側の分隊を撃破したローエン率いる武道家の面々にも見えており合流し高台の開けたところでその一部始終を鮮明に見るとい形になった。巨大な生物と生物のぶつかり合いに発展しアシュレイの破壊力のある拳が地面を砕き遂に街が崩壊していく。女の黒騎士は今のうちはそれを上手くかわせていても徐々に

圧されていたようだ。巨大な龍に変身したアシュレイのテイルアタックをもろに受け瓦礫に衝突し吹き飛んだ。弟の黒騎士が姉側に駆け寄る中でアシュレイは姿を瞬時に元に戻しイオーサの手を引いて瓦礫の中を走り抜けていく。紅蓮に燃え上がる街は地獄絵図と化し生けるものの姿は見当たらずそんな中、姿が戻って副作用なのか焦点が定まらずまっすぐ視線を注がないエルシアが立ち上がり山へ駆けていくアシュレイを気味の悪い笑顔と荒い息で見つめ呟いた。アシュレイもそうだが彼らは体変化型の能力を使う。衣装などは何着あっても足りないくらいだが彼らはお構いなしに使う言わずともアシュレイもエルシアも半裸に近い。そんな姉を気遣い弟らしい黒騎士が自分の鎧のビロードのマントを外し姉に羽織らせている。黒騎士はその悪名の高さから実力を買われても高い名声を受けず蔑まれたならず者の集まりに近いと言うことはアシュレイも知っていたが……彼らを視界の隅に入れ走り去っていった。全てがそうではないのだ。

「お前もオウガの血を引くなら……自重しろ。無駄に命を削るな！」
「私は目的以外には動かない。守るのはシュバルツ、欲しいのはあなただけ。私は……私は……カオスを開かせないことなどどうでも……」

「終わりだ！」

アシュレイの大ぶりの攻撃が見事にヒットし彼女を吹き飛ばした。大きな砂煙が巻き起こるがそこまで被害は出ない。アシュレイは吹き飛ばした後に目でイオーサに合図を送り引く準備をする。

「う……」

「姉さん！」

街の集会場だった巨大な建物の瓦礫に衝突し一時は気を失うがす

ぐに立ち上がったエルシア。その後、追うことはしなかったが気味悪い笑顔と荒い息……まるで人ではないような素振りを見せてその場から弟と共に歩き去った。最初のマント以外の弟の気づかいを無用といいさらに歩き敵の団兵が固まる所に追いつき生き残りとともに戦場から撤退していったようだ。わからないのは……彼ら黒騎士は何を目的にまた、遂行するためにこのチナの城塞都市に攻め入ったのだろうか。

「アシュレイ・オーガ・モノライナー……フッフ……フッフッフッフ！ フッフッフッフッフッフ！ 必ず我が手に……我が手に収め、我が最愛の夫にしてくれよう。シュバルツ……退避しよう。私の一番の宝物は半身であるあなたなのだから……。あなたまで失うのは……耐え難いの」

「だ、大丈夫なのかい？ 姉さん」

「黒騎士隊の女……あなたの姉はそこまでひ弱になった？」

「いや、そうじゃなくて」

「大事無いわ。それにあのアシュレイは無駄に命を奪いはしない。それに最後の一撃すらタイミングをずらして致命傷を防いでいたの。私の完敗よ。霸王レンサースと覇者シルヴィアの子……最高の力を持って生まれ苦悩に苛まれることを約束された王。私の夫に相応しい人は……また、この先で出会うわ」

「姉さん……そうかもね。僕はできれば会いたくないけど」

山道を駆け上がっていく二人は途中から歩いていた。二人とも戦闘においてかなりのスタミナを切らせている。特にアシュレイもエルシア同様に能力使用の副作用で強い目眩にみまわれていたのだ。二人は速度を落として歩いて行く。途中で突然立ち止まったアシュレイが巨大な薙刀を地面に突き刺しイオーサに向き直る。いつも厳しめな表情ではあったが今度はそれでも程度が違う。後ろを歩いているイオーサも止った。息の荒いアシュレイを見ているのだ。地面

に突き刺した薙刀から手を離し坂の中腹で近寄ってくるアシュレイを見つめているイオーサの額に唐突に触れ何かの呪詛を呟き彼女の目の前で握った手を開いた。中から真つ赤な涙形の宝石が姿を覗かせ彼は髪の毛を数本抜くと再び呪詛を唱え細い鎖を作る。

「アシュレイ？」

「どうして俺を助けに来た？」

「アシュレイは私を助けてくれる。私だけ助けられる訳にはいかないから……アシュレイは命をかけてる。なら私も……」

「そうか、目を瞑って意識を集中させるんだ」

「ん……」

「『我、力を司る者の末裔……彼の者に我を愛しむ心あらば我が片親の意志をここに表せ……』」

赤い光がアシュレイの手のひらで起こり収束するとイオーサに手のひらに落とした。真つ赤なくすみのない貴石を摘み火の光に当たて見るイオーサはさらに驚く。アシュレイの白銀の髪が細い鎖になり赤い宝石に留め金のように巻きつき先程の赤い光を放ちながらひとりでに空中に浮いているのだ。その貴石をイオーサが掴もうとするとそれを拒むように貴石の周りに結界が生じ指をはじいた。それを説明するようにアシュレイが言葉を告ぎ遙か彼方にある故郷に目を向けたのだろう瞼を閉じて数秒間黙った後にイオーサに向き直り……。

「き、綺麗……」

「『汝、我が盟約を繋ぐ鎖となれ。我が生涯の覇を共にあらんと決めし魂を汝の意志となりてその者をしばれ……紅き火の魂を我、受け入れん』」

「きゃ……つつ……」

「まだ触るな」

「うん……」

「“母様……あなたの意志を継いだ覇者を見つけました。すぐにそちらに向かいます”」

「どうしたの？」

「俺の手を握ったままとれたなら……お前は……いや、今は知らなくていい。いずれにせよそれをとれたならお前にはおおいなる厄が降りかかるだろう」

「大丈夫……アシュレイが居れば」

「そうか、行くぞ」

拍子抜けするほど簡単にイオーサがつかみアシュレイが手を離すとその貴石は全く力がなくなったようにただ、赤い紅蓮の炎を反射するだけだった。アシュレイの後ろについて歩きながらネックレス状になっているそれを付けようと努力しているようだがけしてなだらかではない山道ではなかなかつかつけれないらしく苦勞している。アシュレイはそれに気づいたらしく少し止まって待っているとすぐにイオーサが追いついてきた。それが何かについてイオーサがアシュレイに問うと単語で返答が返ってきたらしくさらに興味深そうにそれを眺めている。その名も『オーブ』。クリスタルに次いで魔法関連の宝石呪具としては有名な部類だ。オーブは基本的に球形をしているが彼の言うオーブの定義は少し違った。

「これが何でできているか？ そんなことを聞いてどうするんだ？」

「うん……どうもしないけど錬金術には興味あった」

「こいつは錬金術なんかじゃないんだ。錬金術とはあくまでも元素や物質。コイツは人の『魂』と言える」

「魂？」

「ああ、お前は……精神統一したときのまっさらな心の礎に俺を想像したはずだ」

「な、なんで解るの？」

「そのオーブは『焰心晶』といってその者が心の内で愛を欲した時にできる。オーブは基本的にはそういう意志、精神、心が機体になり形成され作れるのはその対象と心が通じた時のみ」

「心が……通じる」

「そうだ」

「アシュレイさん！」

「アシュレイ遅おい！！」

「すまない、さすがにあの数にはてこずった」

護衛をしていた面々やウル、ガンテツなどが集まり城塞都市の状況を教えた。アシュレイがその場で敵の大隊を撃破した時には既に火が回り過ぎていて脆く弱くなっていたという。その後はガンテツの案内で古い洞窟に足を進め内部で休息を取る。そこではこれから皆が取りたい行動が話し合われ残る者、別の道に進む者、途中の村まで動向する者などに別れた。何にしてもアシュレイたちが目的地としては一番遠いのだ。アグレイアは近道を使っても普通に歩けばあと10日、正規の道筋で行くと更に数が重なり1ヶ月……。この辺りの山からはアシュレイが飛ぶことはできないらしい。一人で飛ぶならまだしもドラゴンの亜種が生息するらしいこの先に空路はあまりにも危険すぎる。ましてや背中に4人の人が乗れば尚更だ。

「ふむ、若様は霊峰へ向かわれるか……母君の元へ行かれるのですか？」

「はい。アグレイアの深奥に向かっています」

「なら、我々はここまでだな。アシュレイ君」

「エンロウさんたちはどちらへ？」

「我々は一度、各地方の調査をする。黒騎士団の動向を探るためにな」

「俺達はお前らお子ちゃまとは違うんだ。だが、この先に行くなら気をつけな」

「これ、アルゴ。すまない。まだあの事をねに持っておるのだ。若き覇者よ無事であれ……さらばだ」

「アシュレイ君、また会おう。君とはまたどこかで会えるような気がするしね」

「そうですね。ローエンさん、アルゴさん、パラダイナスさん、エンロウさん。皆さんお元気で」

洞窟の口でアシュレイが4人と彼らに付き添い途中まで向かう武道家たちを見送る。その少し前にエンラクは皆に一礼しその場を去っていた。元、チナの住民は殆どが元の街の跡を復興させると戻っている。アシュレイが見送っているさなか、残っている顔ぶれはウルやガンテツのみで彼らはシドを中心としたメンバーと行動を共にすると言っているようだ。二人はアゲレイアの手前によるある岳山煌と呼ばれる地域にある村まで行くらしい。そこには自給自足の鍛冶師をしている獣人族が多く住んでいるため溶け込めると言っていた。元はガンテツもその出身でアゲレイアの村と唯一交流のある村だと言う。そこにアシュレイが帰って来たためガンテツからその意見を聞き、彼らはそこから準備をし数日後にその場を発つことになった。その間には城塞都市の最外郭部にある生き残った教会に身を寄せている一同。数日が経過し夜を迎えアシュレイはその大きな建物の屋根の上にいた。彼は豎琴を爪弾きながら囁くように歌を歌っている。

『 煌めく星は天の定め
我らは定めに準ずる者』

大地に根ざし天を眺め
死して地下に誘われ……
天命に従い神の与えし大いなる泰安を護り力を得、
新たな境地を迎える

火と共に燃ゆる心、水とたゆたう時の流れ、我らを支える無限の大地、天と地に枝根を伸ばす無限の樹木に現れし夢、氷河に見とれる極まりし精神、雷鳴が伝えし道の声

我ら進む道、輪に繋がり永久の安息を……」

「アシュレイまだ寝ないの？」

「ん？ ああ、こういう夜は故郷を思い出すだけだ。リム、お前は眠れないのか？」

「違うわ」

「ならどうしたんだ？」

「夕食の席にあなただけ見えなかったから心配になっただけ。あなた時々無茶するもの。月、綺麗ね」

「ああ、雲の上ならもっと綺麗なんだが」

「……そういえば、あなたと初めて会ったのもこんな月夜だったわね」

「たしか、そうだったな」

屋根の斜面は急なため瓦に足をかけてリムは膝を抱えた状態でアシュレイの横に座った。アシュレイは抱える程の大きさの小さな竪琴をまた爪弾く。ただ、彼はリムが隣に来たためか声には出さずただ口だけを動かしているようにみえた。この辺りはまだ原始的な生活をしていて魔力が生きているためか住民の消灯も早い。地域によるが科学的な港湾都市や鉱山に並立された巨大要塞都市。空中に何らかの方法で浮いている浮遊都市などこの世界は利用できるすべてをより無駄なく使うことで成り立っていた。アシュレイがそんなことを話しているとリムが更に近づいてくる。

「この大地ほど欲に満ちたところはないだろう。だから人はここに

誘われたんだろうな。自らが……自らにより絶える。神は俺達を破壊させたいのさ」

「……でも、あなたみたいに正義を貫く人も居るじゃない。私も自分では言えないけど助けられる人が居るなら助けたいと思うわ」

「そう言ってくれると救われるよ。だが、神が采配を間違えたのは確かだ。俺達はエリユシオンに誘われるべきではなかった」

「楽園か……か。なら、こう考えましようよ。私みたいに助けたいけど力がない者と助けられる力のあるあなたが幾億、幾兆の命の中で出会えたのってロマンチックじゃない？」

「神の采配にもとるべきところはある……。そうかもな」

リムはニコニコしながらアシュレイの右手を掴んだ。指と指の間に彼女の細い指を絡め彼女としては強めに握ったらしい。だがアシュレイはキョトンとしてリムを見るばかりだった。彼にはそういうことに対する知識や経験がないような様子でリムがつまらなそうに表情をそういつたムスツとした表情へ変化をさせていく。大きめな青い瞳で一般人より飛び抜けてともいえないがなかなか美しいリムは本当にお姫様のようなうだ。いや、そうだったからお姫様なのだろうが……。アシュレイの表情が変わらないところを見ればわかるが全くわかっていないらしい。さすがに業を煮やしたのか先程の座り方のまま完全に密着するように隣に座り彼の肩に頭を乗せて目を閉じた。アシュレイが口を開きリムに話しかける。リムの欲しかったセリフとは違うようだがすぐに反応を見せた。いろいろ勘違いをしている双方だが……とりあえず丸く収まったようだ。

「目を閉じて意識を集中させてくれ」

「え、あ、うん」

「『汝、慈悲を司り我を救わんと働く者。大いなる水の加護を受け我ら生きる全てを救い平穏を与える美しき者なり』」

「ひゃっ!？」

「できた……『汝、我が体の姿より彼の者に覇の恩恵を与えよ。美しき姿に変わり我の代わりに彼の者を守れ』」

「な、何？ 青く光ってるけど……」

「今なら取れるはずだ」

「え、うん。と、取ったけど……これは？」

「簡単にはオーブと呼ばれる守護石だ。それがあれば……お前は災厄から守られるだろう」

「これ、アシュレイが作ったの？」

「まあ、そうなる。俺とお前の心が繋がった証だからな」

イオーサの時とは違い人差し指の爪をはがしオーブに合わせ呪詛を唱えてそれを空中で離す。彼女の物は指輪になり完全な球形の宝石が指輪にはまっている物に見えた。今度も手に取らせその軽い説明をしているようだ。彼女の目のように青いその石を見つめるリムをアシュレイは眺めているようで視線は彼女に注がれている。夜空は綺麗に澄んでいてアシュレイの白銀の髪はより綺麗に見えた。木製の豎琴にも月の光があたり景観はとても美しい。

「ありがとう」

「いや、どうということはない。イオーサは真紅でリムは青い……慈悲か、惑いの覇者の紋章で『蒼慈石』だな」

「やっぱり関係するんだ」

「察しはいいな……それより早く寝た方がいいぞ。明日は朝早いんだ」

「うん、お休み」

最後にアシュレイの頬にキスをして降りていくリム。アシュレイはやっと顔を赤らめているような状態だが……まあ、彼ならいいのだろう。もう一度豎琴を爪弾き彼も教会の内部に入っていた……。翌朝には全員が旅路に備えた準備をし街の住民たちの見送りで裏山

から街を出る。そこにはアシュレイのいう最短ルートがあるらしいが道など見当たらない。巨漢のガンテツですらすっぱり隠れる程の芦の仲間が鬱蒼とした湿地に出たのだ。アシュレイがゆっくり進むためそれに合わせて後続も歩く。難なくとは言わないがその場所を超える。次は断崖絶壁が待っていた。イオーサには苦い思い出があるがこの地域で音をあげてはこの先には行けないとアシュレイがいう。

「芦の湿地の次はこの崖ですか……」

「そのとおりだ。ほぼ垂直の壁だからかなり厳しいぞ。だが、ここを越えるのが今のメンバーなら一番楽だ」

「何やら意味深だな。アシュレイよ、この先には何があると言うのだ？」

「この先はドラゴンや巨大な生物がいます。そして、我が一族からも狙われることでしょう」

「ねえ、アンナさん。アシュレイさんは何であんなに落ち着いていられるの？」

「そういう人だからよ。あのアシュレイがどんな生き方をしたのはわからないけどあんまりいい感じはしないしね」

「ふえ……怖い」

「大丈夫よ。アシュレイは私達の敵にはならないからさ」

断崖絶壁はウルとアシュレイの機転の利いた考えで全員が怪我すらせずに登ることができた。ガンテツとアシュレイがウルを投げ飛ばして上に乗せたのだ。50メートル以上の大絶壁なのだが……。とりあえずその先に進むことに成功したように見える。ガンテツがまずウルを投げ飛ばし次にアシュレイが高く飛び上がり彼女の足を支え飛ばすのだ。ウルも難なく着地し持たされていたロープを木に縛り付けて彼女の仕事を疑う訳ではないが念のためにアシュレイが一番最初に登り切り安全を確認するとシド、リム、アンナ、ガンテ

ツの順に登って来た。その頃、後方には面倒の種がこうも見事と言えりほどのタイミングで面倒を起こしてくれる。実は先の戦闘で敵であったエルシアとその弟のシュバルツが後を追って着ていたよなのだ。ここがどういふ場所か理解できていない上に経験の薄い彼らではそうなつても仕方はないが……とりあえずとばかりを受けたのはアシュレイ以下五名のメンバーである。彼らの身に起きたのは簡潔に言えばモンスターの急襲でもう少し踏み入って説明するなら小型のドラゴン族であるドレイクによる襲撃だ。

「ね、姉さん。何とかここまで来れたけど……何なんだよ。この自然の城塞みたいな場所。ここならまだ城攻めの方が簡単だよ」

「近い」

「何が？」

「アシュレイ……」

「姉さん……さつきからそればかりだよ？」

「好いている者の事を考えて何が悪い？ 私は一刻も早く彼を我がものにして……殺気！」

「うわっ！」

ここは普通の人間では通れなくなっているはずなのだが彼らは通り抜けてしまったのだ。そして、この周辺のエリアで決まっている事は一つ。大型生物による支配と弱肉強食の世界である。後続の二人が何をしたかというところこの生物は五感意外にも神経を恐ろしく発達させてきた機関の魔力感帯というものが備わっており空気中の魔力の微量な動きですら感知してしまう。そして、第二のこの周辺の特徴では大型にしても小さい種の生物は大きな群れを作ることエルシアとシュバルツはとつさに魔術を使う体勢をしたため魔力を空気から体内に吸収していたのだ。それが原因である。

「誰かが俺達をつけ回している。そうでなければ侵入者か……誰か

が魔力を解放したせいでドレイク共が俺達に気づいた。リムはウルと固まって陣の真ん中につけ！！上からの攻撃に備える！」

「ぬう、シドの小僧よ！ドラゴンキラーは使うな！今こそその獅子狩りを使うときだ抜け！！」

「わかった！しかし、なんて重さだ。難しいな」

「リムのお姉ちゃんはおたしの後ろから離れないで！」

「た、頼りにしてるからね！」

「アシュレイ！私は？」

「アンナはリムの近くで弓を使って奴らを落としてくれ！くれぐれも俺にはあてるなよ！」

「イオーサ！サポート頼むよ！」

「うん。アンナとアシュレイは私が助ける……」

アシュレイの背中から横幅が彼の身長の数倍の翼が現れ開き空に踊り出す。薙刀を振り回して突っ込み数頭の龍を叩き切り吹き飛ばしていく。次に攻撃を始めたのはウルだ。いきなり叫び声を上げ耳が発達し手に肉球が出来始め手をつくとか柄な狼の姿に変わった。ドレイクの長い首を爪で切り裂きリムを背中に乗せて駆け回る。ガントツは年なのかそれを使ったがらず巨大な鎚を振り回していた。シドはシドで新しい武器らしいをフルに使いこなし地上に降りて群がろうとするそれらをぶつ切りにしていった。しかし、ドレイクは数限りなく現れひつきりなしに攻撃してくる。そこに救世主と言わべきか白髪に真紅の女性が現れ特徴的な大槍を振り回し空に向かって一喝して敵を追い払った。耳には真紅の石のピアスが光りウルの方でアンナを警護していたイオーサに詰め寄って首から提げていると同じ色のペンダントを見ると……くるくる回りを回ってみている身長はそこまで高くないが美しいその人はイオーサからアシュレイに視線を移しにこやかに彼に笑いかけた。

「くそっ！！きりがない！」

「これでは消耗するばかりだな……」

「アシュレイ！ 防ぎきれないよ！」

「……みんな、一度……崖の下に……」

『我！ 神戦の覇者の一族の者。我らが守りし土地を騒がす弱き龍よ！ 今すぐ失せよ！！』

美しい女性。その人は派手で露出が高く肌をよく見せている。真紅の瞳はやけに大きく結わずに流した白い美髪を払いながら頬の隅に妖美な微笑みを浮かべ長い足、蒼白い程の肌、整った顔立ち。美しいの極みだ。アシュレイの目の前で止まり少し身長差があるがいきなり肩を抱き頭を小突き始める。次はイオーサを指差して小声で呟いた。その後はガンテツ以外のメンバーからの質問が飛んでくる。

「ふうむ……うん、うん。ほお、そうか。ふんふん、申し分ないな。上もあるが……少しやせ過ぎかな？ だが、成長すれば解らんか」

「あ、あの……ってあれ？」

「アシュレイ！ 久しぶりに帰って来たと思ったら可愛い女の子を三人も連れてきて！！ このこの！！」

「アシュレイ？ その人は？」

「アシュレイさんには妹以外にお姉さんまでいたんですか？」

「き、綺麗な人。私……あれ？ この人どこかで……」

「懐かしいなあ」

「お爺ちゃん知ってるの？」

「ガンテツ殿か懐かしいな。私も嬉しく思います。またお目にかかることができようとは」

質問の後はガンテツと女性の話になり後方から崖を登って黒騎士の二人が現れた。彼女は持っていた槍を地面に突き立てるといきなり髪を揺らして頭を下げて自己紹介を始めイオーサが口を抑えて呟

いた言葉でガンテツ以外の後ろのエルシアとシュバルツですら驚愕している。よく見ると髪質はアシュレイとそっくりだった。白い癖のない美髪は特にそうだ。髪質以外にも似ているところはよくある。大きな目と細い体軀。顔立ちと細さなどいろいろなところに見て取れた。

「挨拶が遅れたな。我が名はシルヴィア……シルヴィア・オーガ・モノライナー。前姓はノア・モノライナーだ」

「……そ、そんな、わ、若い。アシュレイのお母様？」

「は？ 聞き間違いだよな？」

「今、何て……イオーサ？」

「ん？ 私はアシュレイの実の母だが？」

「驚いた……こんな若いなんて」

「いや、私は459の身だぞ？ 若いなどとは言えまい」

「母さん。見た目の話だよ」

「そうか？ この姿は確か20の頃の姿だ。私は……いや、私達は年齢を自由に引き返したり進んだりできるからな。それより、その龍人族の娘は私の娘になる覚悟はできているのか？」

「はい。私はアシュレイが良ければ」

「お前はどんなのだ？ アシュレイ」

「まだ、決まっていない。母さんも勘違いをするのは大概にしてくれ……いくらあなたが俺の身を案じていると言いたくても俺には急いでいるようにしか感じられない」

アシュレイがキツイ調子でつぶやくとシルヴィアはカラカラ笑いながらついてこいと言わんばかりに手招きしながら岩山を駆け上がり始めた。アシュレイは後ろの二人にもついてこいと告げ険しい岩山を仲間に気遣いながら登っていく。途中でウルとガンテツは目的地にたどり着きそこで別れて彼らはシルヴィアの案内で登っていく。岩肌がむき出しで高山植物しか生えていない山の大地を登っていく

と夜を迎え彼らはそこで野宿した。シルヴィアは料理が上手いよう
でなかなか手際よく彼女の持っていたリュックから道具を取り出し
て食事を作る。この辺りはすでに強力な結界が張られていて並大抵
の人間では入れないエリアになっているようだ。先ほどの大型
な原生生物すら見当たらない。シルヴィアは持っていた丈夫そうな
木葉を舟形に作り替え簡単な碗を作るとよそい彼女から時計回りに
回すようにいい回し始める。

「我々はここまでだ。レンサースによろしく頼む」

「皆さんお世話になりました！ また、会いましょう！」

「ああ、二人とも元気でな」

「お元気で」

「ウルちゃん。ありがとう！」

「ガンテツさん。ありがとうございます。ご延命をお祈りします」

「シド？ それは少し失礼じゃない？」

「ハハハ！ 問題ない。お前も主に尽くせよ。期待しとるからな」

「ご多幸を……」

「イオーサさん。かわいい！ 顔赤いよ！」

「そんな……私……やせ過ぎかな？」

高山の夜は冷える。そのため皆がまとまって食事をとるようだ。

昼間は少し距離を取っていたエルシアとシュバルツもシルヴィアの
厚意でその輪に加わりシルヴィアの作った具沢山のスープを食べる。
彼女は戦闘時にはそれらは持っていなかったが岩山を駆け上がる最
中に近くの林からリュックを引っ張り出したのだ。その中に入っ
ていたのだろう。大きなリュックの中にはかなり多くの調理や食事
用の碗などを持っていた。それ以外にもたくさんモノがあるよう
で料理を作っても堆積が変わっている訳ではない……。

「と、言うことは皆、覇者の旅路の登場人物になる訳か。特にアシ

ユレイ、イオーサ、リム、アンナ、シドは主体の登場人物ということだな」

「登場人物？ どういうことですか？」

「アシュレイとイオーサ以外はわからんだろうな。この世界は物語なのさ。私や君たち黒騎士も……生き物は皆、伝承になる。いつかわかる時が来るさ。君たちが……覇道を極めれば行けるさ……時空の狭間にあり神の居室であり空席の王座にね」

「わ、訳わかんない」

「お前たちはまだオーブを作っていないのか？」

「オーブ？」

「いつでも作れるからな……だから母さんは急ぎすぎなんだよ」

「へえ、アシュレイも怒るんだ」

「意外な一面かも」

「コイツはレンサースに似て怒りやすいのだ」

「短気なのはあなたに似たんですよ」

「ヴ……」

シドとアンナにそれを作るとスプーンを加えてエルシアが物欲しそうに見てきた。シルヴィアがエルシアとシュバルツをイオーサを見るときのようにしげしげと見ながら気づいたように表情を変えアシュレイに進言する。母親とは言うが彼女はどこか子供っぽく柔らかい部分がある。しかし、豪快という点にも当てはまるから一概には言えまい……。話を戻そう。シドのオーブは彼の鎧のエンブレムの中心にはまり込んで彼の家の紋章と一体化し鮮やかな黄色に輝くダイヤモンド型になっている。アンナの物は彼の髪を錬成して作ったピアスだ。二対の緑色の菱形の結晶が光っている。

「わあ、凄い」

「あの、アシュレイさん。これにはどんな意味が？」

「私が答えよう。騎士シドよ。君の紋章は守りの覇者の物で『守護

晶だ。君は主、つまりはアシュレイの縦になろうとするだろう。そして、君は仲間を守り自らを守る……一番、理を重んじるんだ。アンナ、君は生命の覇者だから『生緑晶』だろう。色だけならウォルストラー殿とそっくりじゃないか。まだ、お若い頃にはよく世話になったよ。私の母が彼女の親友でね」

そんな中アシュレイはエルシアとオーブを作るために手をとる……しかし、エルシアはそれを拒んだようだ。シュバルツを見つめるエルシアをアシュレイが見つめた。シュバルツは周りを見回し敵だつたはずの自分達を敵意のない目でみている彼らに驚きアシュレイの隣にいる姉のところに近づいて行く。姉がシュバルツに耳打ちしその通りに動くシュバルツ……。彼らの絆は相当な物らしい。双子の彼らはやはり似ている赤い髪と瞳に肌の色などいい例だろう。

「『我、汝等を認める者……暗き闇と光を持ちし双体の子よ。我らが力となり芯なる心を携えよ』」

「シュバルツ……大丈夫よ」

「姉さん……僕は大丈夫だよ」

「ほうこれは……、とても珍しい。日と月のオーブが生まれようとはな」

「姉さん……」

「取るんだ……二人で同時にな」

「大丈夫よ。私が付いてる」

二人の物は形を言えば……勾玉と逆さまな勾玉だ。シュバルツの物は白く普通の向きでエルシアは逆さまな黒い勾玉……そこにアシュレイが力をこめ彼らの掌にそれを結合させた。シュバルツの仕草がおかしかったのかリムが笑い顔を赤くするシュバルツ。エルシアは鎧の籠手を取り掌を眺めているようだ。全員にオーブが行き渡り安心していても束の間……そこに天使のような翼を生やした少女

が血相かいて降り立ったから皆驚愕し口を閉じれずにいる。そしてアシュレイとシルヴィアが武器を掴んで目にも止まらぬ速さで山を駆け上がりそちらに向かっていった。

「母様！ 西側……から……はあ……軍が迫って……来て……に、兄様！！ 一つお戻りに……それより……はあ」

「西のどこだ？ 私はアシュレイと向かう。レヴィオは休みつつ彼らを案内しなさい。空は目立つがお前なら大丈夫だろう」

「積もる話は後だ。今はことを急ぐ……」

アシュレイやシルヴィア髪とは違う少し紫がかった髪の毛のレヴィオと呼ばれた少女の後から突撃鎧を構えたケンタウロス？ いや、なにやらよくわからない半獣人が蹄の音をたてながら岩山を軽やかに降りて来た。その男の話を聞きながら全員が各々の移動手段を取りながら先に向かったシルヴィア親子を追う。先ほどの半獣人の自己紹介を受けながらこの近況を伝え彼らはさらに速度を上げていく。

「いきなりで済まない……。僕はレヴィオちゃんの監視役券世話役のニコラ・ユニ・プレンスだ。簡単なことの起こりを伝えるからよく聞いてくれ。あれ？ どこだっけ？ とりあえず……人間の軍隊が聖門、つまりはヘブンスゲートをこじ開けようとしているんだ。まあ、今はアシュレイのお父さんが一人で頑張ってるからとりあえずは大丈夫。……だと思っ」

「はい、場所は青龍の息吹と呼ばれる巨大な滝です。聖戦の最終局面に我々一族を作り神が封じたとされる場所です」

身体能力の高いアンナはユニの隣を走りイオースは炎の翼でレヴィオと同じ高度を飛んでいる。シドとリムはケンタウロスやユニコインなど馬のような生物の血を強く受け継ぐ『精霊族』のユニの背

中に乗っていた。エルシアとシュバルツは『オウガ族』の末裔で体変化を使用可能でエルシアは真つ黒な美しい鬼に変身しアンナの隣を駆け上がりシュバルツも彼は気味は悪いがケルベロスになりエルシアの荷物を背負って走る。レヴィオは言うまでもなく背中から天使の翼が生えていた。そして、滝の近くではアシュレイの父であるレンサースが奮闘している。

「遅い……シルヴィアめ。とうとう愛想をつかしたか？」

「何をバカなことを言っている！ 無駄口叩けるならまだまだ余裕だな！」

「父さん！ 今、加勢します！」

「アシュレイ！ 無事だったか！！！」

親子三人が各々の武器を構え敵の軍隊に立ちはだかった。たったの三人とたかをくくれば死ぬだろう。だが、今回は敵も秘密兵器といい大筒を用意してきたのだ。少し気持ちが前に出るのもわかる……。一番短気な人が顔の隅に怒りをたたえた笑顔を作り夫と息子に許可を得ると体を変化させ槍を振り回し敵の前衛隊を一撃で総崩れに追い込んだ。そして、アシュレイの父親が彼らの右側を秘密裏に通り返けようとした隠密部隊を攻撃し最後に彼の母親の猛撃をかいくぐった兵士を待っていたのはアシュレイの薙刀だ。この三人がそろえば大抵の兵士では長く陣を保たせるだけでよくできましたと判を押せるだろう。ここに先ほどの天使の少女……レヴィオが加われば……惨劇が巻き起こることは言うまでも無い。

「ハハハハ！！ 三人か！！ 今回は我々に聖門を開けさせる余裕を作ったようだな！」

「バカバカしい……」

「ふん、何が神戦の一族だ。所詮は見た目が違うのみの偽人と変わらぬ存在ではないか！！ 今度は我々も新しい科学の国から仕入れ

た兵器があるのだ……今更ともいいたいところだがこの先の村の民全てと投降するならば命だけは助けよう！」

「……（カチンッ！）　なあ、レンサース……アシュレイ」

「行つてよし」

「ええ、行つてください。燃やして良いですよ」

アシュレイの母親のシルヴィアは元はイフリートと呼ばれる炎や溶岩を自在に操ることができた種族だ。彼の父親であるレンサースと添い遂げ何らかの行為をする事で彼女もアークオウガになったという。だが、そのイフリートの力も健在で槍の穂先を岩にぶつけ火花を散らしてその炎を大きくし彼らの大筒……いや、大砲の方がわかりやすいが……それに炎をかぶせる。恐ろしいのは溶けてしまうからなんとも反則以外に言葉が出ない状態だ。彼女自身は炎になれる訳ではないらしいが破壊力は相当なものだ。イフリートの能力はまだ未知数だから何ともいえない。だが、彼女もアークオウガの一族の中でも鍊強な人物であるその彼女だから能力がなくともかなり強い。

「私達を愚弄した貴様等何もできぬクズどもなどこの私が燃やし尽くしてくれる……」

次はアシュレイの父親のレンサースが動いた。独特な形状の太ぶりの鎌を振り回しアシュレイに言葉を告げて彼らから見た右側にある林に鎌から放った風の弧で攻撃を加えて何人かをそこからあぶり出した。見た目で言えば彼、レンサースは温厚でとても危険人物には見えない、のだが……実は一番怒らせてはならないタイプの人物らしい。ニコニコしながら長く根元で束ねた紫の髪を揺らして回り込もうとした隠密部隊を撃破した。……恐ろしい。アシュレイのように完全に息の根は止めていないが人の山を作つてその上に脚を組んで座っている。

「みんな変わっていないか……レヴィオがお転婆でなくなってくれば万々歳なんだけどな。おっと……客だ。アシュレイ、ここは任せたよ」

アシュレイは姿を変えずに次々に走り込んで来る騎馬兵を馬から叩き落としていた。薙刀の刃の手前にある金属製の留め金で騎馬兵の胴を殴り落としていたのだ。そこに炎の翼が目立つイオーサが着地し次にレヴィオ、ユニとその背中 にいたシドとリム。少し後ろをエルシア、シュバルツ、アンナと到着し次々に異形の力を持った敵が現れたのか新兵器を使っていた敵もシルヴィアに叩かれ部隊自体が壊滅し生き残りの指揮がガタ落ちした結果……。恐ろしくなったのか次々に部隊を引き上げていった。アシュレイがたまたま受けた切り傷を見たアンナがすぐに駆け寄る。

「あ、アシュレイ……酷い傷……ちょっと待って」

彼女が触れた傷が瞬時に回復しすぐに周りが目を疑う。そこにレンサースとシルヴィアが現れて街に案内されていく。今いる地点はまだ山の中腹らしく地形も周りとは少々違い大きな穴があいていてそこに高い針葉樹が何本も生えている場所がある。そこでアシュレイのようにレンサースが長い動体を持つドラゴン族のナーガと呼ばれる巨大な龍になり彼の背中へ全員を乗せて先程のくぼみの奥にある滝に突っ込んだ。するとひんやりとした空気を感じながら洞窟を抜けていく。そして……その先に見えたのは……。

「うわぁ！……！」

「凄い……絶景だな」

「私、このことを本で読んだ。『太古なる神戦の証は白と黒の都。我らはそこから生まれそこで絶えん。美しきアゲレイアの本姿を表

し……その民は国を築き正を慈しみ、世を歩み、大地を堅固なる絆を築く礎とせん』。この都が？ 凄い……私、私、史実を見てる」
「我らが故郷、アゲレイアの覇国だよ。アシュレイも私もここで生まれたんだ」

「まあ、私は嫁だからな。ここのことはよく知らん。しかし、いいところだ。保証しよう」

イオーサの述べた通り白と黒の都は美しく朝日を照り返し大きな雄大な土地の光をたたえている。アシュレイは村と言っていたがそんな規模ではなくとも雄大だ。記述や伝聞では山と呼ばれるアゲレイアは多くの火山が連なる火山山脈で一列に並んでいる火山以外にも活火山が周りに隣接しているらしい。アシュレイ達が登って来たのは西側からでそこは切り立った岩場が多く小型の龍や巨大な昆虫、幻獣などが住む危険な地域だった。しかし、シルヴィアやアシュレイより生まれた土地だから土地勘が強いレンサースが言うにはそれが一番ベストなルートだったようだ。彼らの上った反対の東側には水捌けが悪く雨の多いすり鉢状の湿地を通らざるを得ずそこには底なし沼や巨大な水生のモンスターが多い。北には今……一番活動が盛んな火山が待ち構え南には凶暴な軍事国家の要塞が三角形の頂点のように腰を据えているという。先ほどの襲撃もその軍事国家の襲撃の一部だったらしい。海を渡ったその先にある化学の国の技術を取り入れ始めアークオウガの戦士とわたり合おうとしているようだ。それでも魔法や異能の方が未だ強力である事は言うまでも無いとレンサースはイオーサやリムなどの知識が豊富なメンバーに伝えていた。もちろん、アンナとシドも耳に入れてはいたが国に入る前までの景観を楽しんでしまいほとんどは耳に入っていないと言った感覚だろう。

「凄い所ですね」

「ほお、君たちがアシュレイを支えてくれる覇者の卵の皆さんだね。」

至らない息子だがよろしく頼むよ」

「そんなことないです」

「おやおや、シルヴィアの後継者はそんなに早く見つかったいようとは」

「やっぱりシルヴィアさんも愛し攻める覇者なんですね？」

「彼女がそれ以外の何に見えますか？」

「レンサース？ 私が猪突猛進のイノシシ女と言いたいのか？」

「母様はどう見てもそうです」

「れ、レヴィオ……」

街に入る前に先に彼らの家に帰って支度をしていたレヴィオがアシユレイに飛びついた。彼女も力がすさまじくあのアシユレイが吹き飛び城塞の壁に衝突して皿のように薄い衝突痕が残っている。その後、彼らは歓迎ムードで村人？ いや、国民には迎えられた。アシユレイの父であるレンサースのアドバイスからオーブを見せながらの凱旋をしたからだ。両親であるレンサースとシルヴィアを先頭に二番目にアシユレイ、二列目に騎士の証を持つ三人のメンバー。エルシア、シド、シュバルツが並び次は残りのリムとアンナ、イオーサ。最後尾に先ほど加わったレヴィオとユニが歩く。白と黒のモノクロ調の建物が続き大きな広場に出るとその真ん中に仮設の舞台が用意されていて一対の王座と小さな椅子が見えた。

「よつと……面倒な儀式など手早く終えよう。私は一日の間寝ていないのだ」

「こらこら、民の前で示しがつかんど。王妃なのだからもっとしっかりしてくれシルヴィア」

「え？」

「俺はもう、驚きませんよ。何があっても」

「予想はしていたわ」

「うん。リム様のいうとおり。私もしていた」

「ほえ、本物の王様なんて見るの初めてかも」

「姉さん。なんだか僕、緊張してきた」

「大丈夫いつもの謁見の時みたいにしてればいいのよ」

驚かないと言っていたシドも驚いた。いきなりアシュレイが前に歩きだしたのだ。そして、レヴィオも前に出ていき両親が座っている椅子の横に用意されていた椅子に座ったのだから……だれでも驚くだろう。式典が終わるとすぐに体勢を崩し椅子から立ち上がり手を上に付きあげ彼が戦闘時の怒声以外で大きな声を出すのは珍しいが……。

「皆！心配をかけてすまない！今帰った！」

「アアアアアアアアアアアア!!!!!!」

大歓声が上がりセレモニーが始まる。アシュレイの帰還がそこま
で重要なことだと考えていないシドを筆頭にした今、初めてこの土
地に入つた面々は完全に氣後れしているが用意されていた椅子に座
る。先ほどの式典の後彼らは使用人たちに連れられモノライナー
家が生活しているらしい城に招かれていたのだ。椅子に座らされて
待っている一同は相変わらず氣遅れしておりなおかつエルシア以外
は石像のように硬直して緊張している始末……。そこに騎士とまで
はいかないがよく手入れされた輕装の鎧を身に付け腰に劍を提げた
アシュレイとお姫様つぼくドレスをまとつたレヴィオが入つて来た。
その後ろからはやはりそういう服装のレンサースとシルヴィアが続
き席につく。

「皆そろってくれたな。改めて自己紹介させてもらう。俺はこの王国、ホーリシア国の第二王位継承者のアシュレイだ」

「皆さまとは余り接点がございませんがわたくしはレヴィオと申し
ます。第二王位継承者で破壊の覇者を務めます」

「ユニ……入ってきなさい」

「は、お久しぶりですね皆さん。僕はこの国の騎士団長のユニ。抱擁の覇者をしている」

「と、自己紹介はここまでだ。皆、アゲレイアの山中深くまでよく来てくれた。今日からは少しやるが多くなつて立て込むだろうけど耐えてくれ。覇者となつたからにはそれなりの覚悟も必要になる」

「その通り。私とレンサースも通つた道だ。君たちならできる……と胸を張つて推したいがそうもいかん状態が続いてな」

「まずは、君たちを覇者として認めた証を立てなくてはならない。ん？ そんなに怖がる事ではない。血の契約などではないよ。手形を収めるのみさ」

このような会話が続き各々の客室に案内されたが落ち着かず皆結局中庭のテラスに集まつてしまった。最初にアンナ、次にエルシア、三番目にシド……リム、イオーサ、シュバルツ。彼らが全員出てきて話しているところにユニがレヴィオと共に現れる。地面に輪を描くように座り彼らは再び談笑を始めた。くりくりした大きな瞳のレヴィオが一番話に食いついてくる。外界に出たことのないらしい彼女には彼らですら珍しいのだ。

「まさか、アゲレイアの故郷が国で……アシュレイが王子様なんてね」

「アンナの言うとおりね。私みたいな小国の姫とは格の違うものみたいだし」

「ただ者ではないとは解っていたけども……。ここまで凄いと」

「ますます気に入った」

「姉さんは少し自重してよ」

「皆さんお揃いで何のお話ですか？」

「大方アシュレイの話でしょう」

「レヴィオちゃんとユニさん」

そこにアシュレイも加わることで話はさらに盛り上がる。鎧を着た彼はまた別の見栄えがし髪の毛はあまり長いとも言えないが襟足が少し長めで紐で縛っていた。剣を腰につけてはいるが全く抜く気はなかったのか邪魔そうにみているようでよく気にしている。軽装の金属の鎧は外に出ると陽光を反射して輝いた。この土地は山以外にも囲まれていることは先ほどレンサー一家から伝えられていて皆知っている。イオーサだけではあったがすぐにシルヴィアのいう意味深な発言に食いついてきた。アシュレイも言おうか迷ったようだが彼も腹をくくつたらしく地面に腰をおろし輪を作って座る皆に加わりこれからの行動についてを語り始める。

「俺がどうした？ 俺が王子だと言うことに関しては驚いてもおかしくはないか……。まあ、俺は窮屈な城が嫌いによく外に出ていたからそんなそぶりも見せていないし」

「兄様だけです。レヴィオだって外に出たいのです」

「レヴィオちゃん。ダメだよ。お兄さんみたいに体が強くないんだから」

「むう、ユニも酷いです」

「僕の事は何とでもいっていいよ。でも、解ってほしいのは僕も外に出してはあげたいんだ。だけどこの前みたいに無理してアシュレイの行方不明事件を起こしてもいけないでしょ？」

「な、何ですかそれ？」

「俺が外界に何年もいることになった理由さ。重傷の状態で滝壺に落ちれば俺でも気を失い流される……。そこで人攫いさ」

「へえ、そんな経緯が……」

「レヴィオちゃんの力はこの国ではアシュレイの次に強い。でも、彼女はあんまり体が強くないんだ。だから、彼らの幼馴染で王宮の居候の僕が世話役を仰せつかっているわけ」

アシュレイが座つたのはイオーサとシドの間だ。一同の視線がアシュレイに注がれ『これからどうするの?』というリムの実直な質問に答えなければならぬ空気を生みだした。ユニまでもが知らないということはまだ王室の中でも発表の是非を検討しているということだ。アシュレイはその旨も伝え芝の真ん中に赤子の拳程の磨かれていない原石を落とし魔力を込める。するとこの世界の地図が現れユニ、レヴィオ、イオーサ以外は目を丸くした。以前にもアシュレイがリムに語った事があるがこの世界には大きな変動や民族の違いが大きくかわり各々の地域的に発展の要素が違ふのだ。科学、古代の神技、自然、魔法など発展の要素はさまざまである。しかし、力のないものはその戦慄の輪から消し去られ姿すら残さずに消えていくという。

「よつと、簡潔にいうことは不可能に近い。なぜならこの世界と他世界の栓をする。という話をするんだからな」

「十分簡潔……」

「そうか。ならいいがここからはそうもいかん。このこの俺達の過ごす世界には『無限の可能性』パラレルワールドという形状異性体が存在する。それを『世』と言う」

「あたしギブ」

「そして、俺達がいるここエリュシオンは『界』と呼ばれそれを進める要素が『時』だ。この三つの要素を超越するのが『霸王』だ」

「不老不死であらゆる『世界』、『時間』、『可能性』を操るのが霸王?」

「イオーサは理解したが他は全滅だな。解りやすく言えば『覇者』になった時点でその肉体は時間が進まなくなり……仮に言えば他の可能性の中で奴隷のままの俺と今の俺が交信でき……このエリュシオン以外の封印の紋章の向こうの世界に行けるようになる。加えて俺達は……死の選択ができるようになる」

最後の説明であまり深く理解できていなかったアンナも理解しアシュレイが中心のあたりに転がした透明な石から現れた世界地図を眺める。イオーサがそれに触れようとするが触れずリムが苦笑いしながらそれを見ていた。眠くなったらしいシドとシュバルツの二人は気持ちのよい陽光のなかで虚ろ虚ろしている……。ユ二などとうに寝ているが……。そして、彼らが今置かれている状態とこれからの旅路についてを地図を説明し始め足元にあった小石をつまみシドとシュバルツの兜に当てた。カンツと金属に堅いものが当たる音が響きユ二はほっておかれている。

「ここからは今の俺達の状態だ。俺達はまだ覇者ではない。だから年も取るし死にもする。だが、いうなれば覇者の卵であることは確かだ。この地図で俺が今からピックアップするところに行かなくちゃならない。各ゲートを俺達が閉め直さなくてはならないんだ。それが覇道の真意」

「ふーん。ゲートめぐりするの？」

「アンナ、イオーサを見習え。そんなに簡単なら欲に塗れてこの大地を征服したがつてる連中がこじ開けているだろう？ それに、そのゲートが簡単に開けられない理由が他にもある。ゲートって言うのは俺達アークオウガの先祖が築き上げた防壁だ。向こうからもそう簡単には入ってこれないが何かの拍子に一人、二人抜けてくることがある。しかし、そいつらは俺達のようにこの世界には適応できていないからゲートのまわりにしかいられない」

「そいつらを倒せばいいんだな？」

「ユ二、いつから起きてた？」

「今」

「だが、問題なのは敵になるであろう向こう側の者達だということ。は視野に入れておけ。奴らの適応力は未知数でどうやっても俺達では抑制することができなくなってしまう。だから、俺達は向こう側

からもこちらからも開かれないうに封印し直さなくちゃならないんだ」

「理解しました。ですが、僕たちにそんな力があるんですか？」

アシュレイがシュバルツの質問に答えた。これからは三組みに別れて旅することになるという。不満を持つ者もいたが運命は先に決められていて彼らでは曲げられないとアシュレイが語りその場は丸く収まったようだ。覇者の旅とはいっても何代かに一人霸王が生まれてその周りに人が集まらなければこの世界は成り立たないとアシュレイは言っていた。エリュシオンという名がついたこの世界が楽園であるかどうかは彼らにかかっているらしい。

「これからの旅は三組みに別れる。まずは俺と来る組にシド、アンナ、リム、イオーサ。第二隊としてウォーブル姉弟。最後にユニとレヴィオだ」

「私、アシュレイと一緒にいい」

「無理を言っな。そんなに簡単なことではないんだぞ」

「……」

「すでにオーブが示してくれた。シュバルツと俺、レヴィオにしかゲートを閉める力はない。だから別れたんだ。姉であるお前がシュバルツを護らないで誰が守るんだ？」

「兄様。私は外界に出ても？」

「お前、次第だな。俺は既に話して来たからな」

「お返事は？」

「YESともNOとも言わなかったよ」

「そうですか……」

一同が解散し各々の部屋でオーブを眺めていた。アシュレイが自分の部屋で書物を書いているとシュバルツが訪ねて来たようだ礼儀正しくノックし扉を開けてからも一礼し扉を閉めて扉の前で止まる。

それに加え鎧を着けず武装もない。アシュレイは何を聞きたいのか既にわかっているような素振り椅子から立ち上がり部屋の隅にある小卓を指差して椅子に座るように勧めて座らせてから彼も座った。

「自信がないのか？ それと俺達が信用ならないか……」

「はい、後者に関してはむしろ逆です。あなた方から敵意は感じられない。でも、これだけは聞かせてほしい。あなたは僕達が裏切るともわからない敵であると言うことを理解しているんですか？」

「敵味方か……俺は人は人でしかないと思っています。お前たちハーフオウガもまた、この地に生まれた赤い血を体に流す者だ。少なくともそれで敵対するなら馬鹿げている。何故、味方同士で殺し合いをしエンジェルやオウガのような異界の異種族による蹂躪に備えないのか……このままでは世界は滅びる。少なくともこの十年でヘブンズゲートは向こう側から開かれる」

「……僕には解らないんです。どうしていいか……。あなたはわかっているようだ。先ほど姉さんに運命と口にしていましたし」

「俺にも運命の指針は解らない。しかしだ……シュバルツ。君が切り開くか切り開かないかは君次第で決まる。姉を見ていれば自然と答えがでるだろう。お前に俺が言えるのは……一番大切な人や者を救いたい。一緒に生きたいと思うならどんなに過酷な定めにも逆らえということだ。俺はそうして……力及ばず一人の命を失い耐え難い悲しみに身を裂かれるような苦しみを覚えた。お前は……どうしたい？ 今、言えるのはそれだけだ」

アシュレイが窓の外を見てから机の上にある銀色の板を取ってきた。シュバルツに手渡しすぐに部屋を出て行く。その銀板には写真のように何かが写し出されていた。不思議な技術でそちらに好奇心がむいたシュバルツだったがすぐに写真の中に写るレンサース一家の写真の中に一人見覚えのない人と聞き覚えのない名前が彫り込まれそこに上から横に二本の傷を付けた跡があることに気づいてい

る。

「フュ……ヒュー……ジ……ア？ ヒュージア……この人、アシュレイさんと似てる。レンサースさん、シルヴィアさん、レヴィオちゃん、アシュレイさん……ヒュージアさん……もしかして」

中庭のテラスで壁に手をついてもたれているアシュレイを彼女の部屋のベランダから見つけたアンナ。大きな声でアシュレイを呼び振り向いた瞬間に15メートル以上あるう下に飛び降りた。驚愕の表情をするアシュレイだったがダイビングキャッチでアンナをとらえ何も言わずに立たせるとすぐにまた同じように空を見始める。さすがに不信感を抱いたらしいアンナが同じようにテラスの縁に手をついて隣に立った。長い緑色の髪は入浴後なのか少し湿り気を帯びていて綺麗にまとめ上げられている。

「アシュレイらしくないじゃん。どうしたの？」

「いや、昔のことを思い出していただけさ。気にすることはない」

「話してよ。軽くなるかもよ」

「そうかもな……俺がなんでお前を試したか解るか？」

「え？ 足手まといになるからでしょ？」

「それもあるが……俺はあまり強くないから……仲間になっても助けてやれないからだ。それが怖かったただけだ」

「どうして？ それはアシュレイのせいじゃないでしょ？」

「昔な……俺が弱かったせいだ一人……大切な人が死んだんだ」

「……それで？」

「姉さんは……俺が足手まといになって死んだんだ。誤解を生んだだろうから訂正するが俺は俺が死にたくないからお前を一時的に拒んだ訳じゃない。俺はもう、周りで誰かに死なれたくないんだ。あの街で俺はまた形は違えど罪を犯した。騎士アトモスもそう、他の兵士もそう……奪ってはいけない命を奪ったんだ」

「それは違うと思うなあ。だって……このオーブを貰った時から周
りから変な声が聞こえるんだけど……聞こえる気がするもの。アシ
ユレイのお姉さんってヒュージアって言うんでしょ？ 多分、アシ
ユレイが悔やんでるとそれだけ彼女も浮かばれないよ。だからさ、
これからは私やイオーサ、シドとかリムとか……まだ少し疑いが残
るけどエルシアやシュバルツだって悪くはしないはずだよ。少なく
とも私は一人で背負ってほしくないな。イオーサも言ってたよ。ア
シユレイは一人で背負うから危なっかしいって。私を叱った癖に自
分もそうじゃないかってさ」

その日から数日経過し彼らはそれぞれの使命を帯びて旅立ちを迎
えた。最初に旅立ったのは黒騎士の姉弟のエルシアとシュバルツだ。
レンサースや国の騎士団から見送りを受けて凱旋しながら進んで行
った。その後、アシユレイ率いるシド、リム、アンナ、イオーサも
旅だつて行く。アシユレイの背中に乗りまず彼らは別々のルートで
火の大陸であるボルケーノに向かって歩み出した。最後にある条件
付きでレヴィオが少し遅れて旅立ったようだ。ユニのお守り付きだ
がレヴィオもアシユレイと揃いの鎧を纏いアゲレイアから旅立った。
親としては複雑なのだろうがレンサースやシルヴィアも旅立ちを見
送り子供達は次々に……各々の信念の許に未来に向かって突き進ん
でいくのだ。

「思い出すか？」

「ああ、レンサースがまだ覇者とは呼べないただの青臭いガキの頃
のことをな」

「アシユレイも乗り越えたようだ。ヒュージアも見守ってくれるさ」
「そうだな」

彼らはこの先も歩んで行くのだろう……。二人は山裾にある敵の
軍基地を睨んでいる。彼らも何かを仕掛けるようだ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3540q/>

ROUTE・ルート

2011年10月6日20時49分発行